

チャイナドレス退魔師は 敵でないと満足できなくなる

木森山水道（夜山の休憩所）

「ご挨拶」
ご鑑賞いただき誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」
体験版には文章と挿絵の全てが収録されておりますが、
製品版には次に挙げるおまけ要素が追加されます。

- ・挿絵に使用した全CG（5枚分）のデータを同梱。
（サイズは1024×768。形式はPNG）
- ・挿絵を纏めたPDFデータを同梱。

「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7と9と で確認済み）
によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。また、個人の範囲でお楽しみ下さい。

目次

第一話	敵に散らされる純潔	3
第二話	娼婦退魔師の初仕事	47
第三話	輪姦奉仕の浜辺	87
最終話	勝利者の屈服	117

主な登場人物

メイリン 『閃光』の異名を持つ女退魔師。同業の恋人を持つ。
ラヴァンダ 熟れた妖怪変化。メイリンの純潔を奪い、精気収集娼婦とする。

第一話 敵に散らされる純潔

夏真っ盛りのリゾート地。時刻は草木も眠る丑三つ時。

某県某市の外れにあるラブホテルの廊下を、メイリンは一人で歩いていた。

背筋を伸ばし、足音どころか衣擦れの音すらたてていない。見るだけで溜め息がつきたくなる洗練された挙措で足を運んでいる。

一言で言えば、チャイナ娘だった。

お団子型のヘアクリップ。マイクロミニじみた丈のチャイナドレス。学生の体操服姿みたいなハイソックスと靴。そして、手には籠手がつけられている。

どれもツヤツヤした青色を基調としていて、清水のような清廉さを醸している。
(ここアルな)

胸中で呟き、対面したドアに掌をつける。

手を突きだした拍子に、丸く突き出る乳房がフルン、と揺れた。

格闘ゲームか漫画かアニメか、二次元世界から抜け出てきたような娘は二十歳前後の美娘で、凜とした清々しい空気だけでなく、健康的な色気も醸している。

お団子型のヘアクリップの髪は栗色のセミショート。一本一本がサラサラしている。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

目尻に力の籠もった垂れ気味の目には、太めの眉毛と同じように意志の強さを窺わせる鶯色の瞳が輝いていた。唇の肉付きも牡丹色も薄いのは彼女の処女性の現れだった。胸元はメロンでも抱えていそうな実りぶり。下に行くほど丸みと張りを帯びる釣り鐘型を表しながら堂々と突き出ている。

風が吹けば股間が丸見えになりそうな短い裾から伸びる足は長い。太腿はスポーツ選手じみた逞しさだが、太いというよりもムッチリしている。男ならば頬ずりしたくなる艶めかしさだった。

（とても大きい妖気……妖怪が一体……荒々しい牡淫魔の気がふたつ……残りのふたつは人間の女……おそらく十代アルな）

精神を研ぎ澄まし、ドアの向こうにいるモノたちの気配を確かめるメイリン。

人間の世界の裏側には、一つの世界が広がっている。

そこは人間界で生み出された感情の行き場である。二酸化炭素が植物に吸収されるように、喜怒哀楽の権化である人が吐き出した感情はすべて流れ着く。それがより集まってできたエネルギーの塊。それが、向こうの世界の住人だった。

ふたつの世界は基本的に断絶されているが、天災や人が行う呪術的な儀式によって境目が曖昧になり、向こうのエネルギーが流れ込んでくる場合がある。

妖怪、妖魔、淫魔と呼ばれるものたちは、向こう側のエネルギーが実体と自我を持

った存在だった。

メイリンは、そんなものたちを駆逐して人間を守る退魔師だ。

扇情的なチャイナ服姿は『退魔装甲』という退魔師としての正装だった。一見してコスプレシヨップで揃えられそうなセットだが、実際は、装着者の退魔力を防御力に変換する性質を持ち、値段もすこぶる高い。若い色気を振りまくデザインも、度を超えて好色な淫魔を引きつけたり、油断させるための方便である。

籠手は防御力でなく攻撃力を発揮する。武器よりも徒手空拳が得意な退魔拳師の専用武器だった。

(今助けるアル)

人外の者がこのホテルを根城にし、女を食い散らかしているという情報を、所属する退魔組織がキャッチして二日。協力を取り付けたホテルの通報で駆けつけたメイリンは、被害者の女たちへの同情心を強める。

きつと無理矢理連れ込まれたのか、何も知らずについてきたのだろう。

現代の淫魔は人間とのセックスを楽しむ術に長けているテクニシャンだった。強力なものは精気を吸い取るそうだが、ともかく基本的に危害を加えない。端的に言えば、ヤリすてておしまいだ。

人外と性交渉をするなど人間としてはタブーであるし、淫魔とのセックスに嵌まっ

て人生をズタボロにする例がたくさんある。

例え見ず知らずの人間でも、そんな不幸からすぐにも救出してあげたくて堪らなかつた。

（優……わたし、頑張るアルよ！）

被害者に思いを馳せ、飛び込むことを決意すると、最後に相思相愛の想い人の顔を思い浮かべる。いつも自分を気遣ってくれる優しい彼は、胸の中で今日も励ましの笑みを静かに向けてくれた。

今はお互い、離ればなれで任務に当たっているが、今よりも腕を上げ、生活に不由しない財産を蓄えられたら、結婚して彼と幸せな家庭を築く。たくさん彼との子供を産んで賑やかな家族を作りたい。退魔師として世のため人のために異形と闘うメイリンは、そんな夢も持っていた。

スーッ。

ホテルから借りたマスターキーで扉を開け、音を立てずに中に入った。

「あんっ、アンツ、あああ、すごいっ、チヨーいいッ！」

「へへ、どうだ俺のモノは。こんなの初めてだろ」

「んああ、いくっ、またイクツ、イクウウウ……！」

「おう、イケイケ、またイツちまえ」

第一話 敵に散らされる純潔

部屋は二十畳ほどもあるというのに、室内の隅々まで男女の汗と性汁が充満していた。部屋の真ん中にどっかり鎮座している真っ白いベッドの上で、派手なタトゥーをした裸の男ふたりが、それぞれ日焼けした裸の娘を這い蹲らせて励んでいる。

ふたりとも揃って向こう側を向いていた。

ツンとした甘酸っぱい刺激臭も、人間が淫魔とケダモノの交尾をしている様子も、処女であり、セックスは心に決めた人とだけするものと信じているメイリンには眉を顰めたくなる現実だった。

「あ……………」

埃の着地音ほども音を立てず、自分の家に帰宅するように気軽に入ってきた闖入者に気付いた女が間の抜けた声を漏らした。

日焼け娘たちの頭の側で悠然と椅子に腰掛けていた、下着姿の熟れた女は一瞬ポカんとしたが、すぐに目尻に鋭さを宿らせる。

だが、メイリンの方が速かった。

「魔滅閃光掌！」

マイクロミニの裾を翻らせ、赤いショーツの胴底をチラチラと晒しながら数歩の距離を一気に詰めると、人間の姿をした淫魔の背中に掌打を見舞った。

ホームラン狙いの野球選手のスイングばりの風切り音が響き、背中与掌の接地面で

燐光の爆発が起こる。

ギヤアアア!!!

男は微動だにしなかった。猛烈な勢いで打撃を受けたというのに吹き飛ばどころか仰け反ることもない。だが、交尾臭が漂う空間に相応しくない痛苦の大絶叫をあげた。そして、その存在を消し始める。炭酸ジュースの気泡が弾けるような音を立てながら、湯気が消えていくように霧散していく。

「ちよっ、なにこれ……なんなのアンタは!!」

セックス相手の異常な消滅プロセスを認めた日焼け女が、目を白黒させてメイリンを見る。

「てめ　え！」

仲間の断末魔の叫びに身の危険を悟った男が、犯していた女を突き飛ばして構えを取った。

だが、その時には既にメイリンが肉薄していた。『魔滅閃光掌』は退魔拳師の自慢の技で、これまでも同レベルの淫魔を一撃で葬ってきた凶技である。確実に決まった感触がすなわち勝利の証であり、本当に消えるまで見届ける理由はない。必殺の攻撃をクリーンヒットさせた後、退魔拳師はすぐさま隣の淫魔に向かっていったのだった。

グエエエエエ!

第一話 敵に散らされる純潔

大ボリユームの胸元をブルンと鋭く揺らしながら、振り向いた淫魔の鳩尾に掌打を叩き込む。まばゆい燐光が室内全部を埋める中、末期の絶叫の余韻を残し、最後の淫魔が消えていく。

「へえ、たいしたもののねえ。チンピラみたいな淫魔とはいえ、そんなに若いのにたった一撃で消しちゃうなんて」

残る一人の異形がゆっくりと立ち上がる。低くて粘り気のある、妙に色っぽい声だった。鼓膜を揺らす前にうなじを舐めて情欲を煽る、そんな熟れた妖声。

(こいつ……手強そうアル)

力を抑えているのは分かるのだが、漏れ出る妖気の質は牡淫魔たちとは大人と赤子ほども違う。扉越しに存在を感じた時よりも、実際に対面している今の方がより強大さが理解できた。

佇み睨む退魔拳師の額に脂汗が浮く。

「ふふ、私の力が分かるのね。見かけよりもずっと強いんだ……すごく可愛いくて、とても美味しそうな身体をしている若い子なのに。そんなに緊張しなくていいわよ。全力でかかってきてみなさいな。あなたが思っているほど、分の悪い勝負じゃないはずよ」

息を殺して戦略を練りつつ出方を窺う退魔拳師とは対照的に、女子新入社員を歓迎

する世話焼きの先輩みたいに、親しげな視線を向けてくる。

何しろ相手は異形。それが実年齢通りだということもないだろうが、外見は三十代の前半に見えた。街を歩けば『上品で気さくな美人セレブ』と道行く人は振り向くとだろう。

緩くウェーブのかかった薄紫色の髪。涼しげな切れ長の目は、ほっそりした頬に圧迫されて、色っぽくたわんでいる。アメシストの瞳は同性の退魔師が見つめられても胸の奥が落ち着かなくなる怪しい色香に満ちていた。真っ赤なルージュの引かれた唇は厚く、幼女のように瑞々しい。妖怪の持ち物なだけに、まるで男の唇を吸い寄せる毒花のよう。

フリル満載のレースのブラジャーはラベンダーの紫色をしている。ハーフトタイプのカップが、どっしりとした肉釣り鐘を保持している。持ち上げられている肉房は球に近い。きめ細かく、陶磁器の白さを見せつける乳肌は見るからに柔らかさそう。指をほんの少し押しつけただけで、全周囲の乳肉が抱擁してくれそうだった。その谷間に顔を埋めれば、天にも昇る包まれ感を与えてくれるに違いない。

逆八の字に窄まったわき腹は、へその外で入射角度とは反対方向に広がっている。脂の乗った腰回りの曲線は柔らかく、肉の詰まったポリューミーな桃尻へと伸びている。

第一話 敵に散らされる純潔

太腿は退魔娘のものと同様にムツチリしていて申し分ないものの、こちらは張りつめていると言うよりもたつぷりとしている。柔らかそうな見た目は、少し動いただけでフルンと波打つ様子を想像させる。

「あなたたち逃げるアル。こいつは妖怪で、今消滅した淫魔よりもずっと恐ろしいやつアルよ！」

目を白黒させて「あ、あ、あ」と無意味な呻きを上げ、こちらを指さしている日焼け娘たちに叫ぶ。

目の前の妖怪が強いのは間違いないものの、勝てない相手でもないだろう。だが、被害者を守りながら戦って勝てるほど生やさしいとは思えない。形勢不利と見れば、彼女らを入質にとることだって考えられるのだ。ならば、足手まといには退出してもらった方がいい。

叫びを理解してくれたらしく、日焼け娘の片方が立ち上がった。ふしだらな汗で褐色の肌をテカらせ、股間から淫魔の置き土産の汁と愛液を垂らしながらよろよろと移動する。

「そうアル、そつちの人も連れて早くここから
最後まで言えなかった。」

ガッツ！

立ち上がった娘は、なんとメイリンにタツクルしてきた。思いも寄らない不意打ちに、流石の退魔師も対応できず、受け身を取るだけで精一杯だった。

日焼け娘は恩人であるはずの退魔娘に馬乗りになり、胸ぐらを掴んで怒鳴った。

「ナニしてくれてんだよテメエ！ 折角いいところだったのに！」

「え……え……？」

呆然とするしかなかった。助けようとした女に体当たりされた上に怒鳴りつけられるなど初めてのことであったし、こんな状況は夢にも思ったことはない。

「こっちは高いカネ払ってたんだぞ！ あんなセックスの上手いデカチンはそうそっういないってのに、どうしてくれんだ！」

「あ、あいつは淫魔アル……人間の敵で、麻薬みたいにセ……え、エッチで女をダメにする悪者アルよ……それに、その女も同類で……わたしはあんたを助けるに」

頭から蒸気を出しそうな女に説明する。声は露骨に震えてしまっていた。こんな情けない声を出すのは、何年ぶりだろう。

馬乗りになっっている女の向こうでは、女妖怪が愉快そうに含み笑いしている。まるで喜劇でも見ているようにくつろいだ様子で。

「あいつらが淫魔で、ラヴァンダさんが妖怪だなんて、シなこと知ってたんだよ！ アタシが言ってるのは、この落とし前をどうつけてくれるかってことだ！」

「な……なんて言ったアル……淫魔だつて……妖怪だつて知っていた……？」
信じられない台詞だった。合意の上で人間の敵と寝ていたというのだろうか？
ガチャツ、ガチャツ……ガチャツ。

困惑を深めているメイリンに、もう一人の女が両手首と首に枷を嵌めた。
黒光りするレザーの手枷と首輪だった。

「な、何するアルか！」

拘束具に言いしれぬ嫌悪感を感じ、引きちぎろうとした。だが、いくら力を入れて引張っても取れない。

（おかしいアル……何もかもおかしいアル……）

助けようとした娘に乱暴され、勝手に着けられた枷は取れない。女妖怪は余裕たっぷりでありゆきを眺めていて、退魔師に狙われているというのに一向に逃げる素振りがない。

（このままじゃ埒が明かないアル……まずはあいつを倒してこんなへんてこな状況を収めるアル！）

「ごめんアル！」

馬乗りの女を脇に押しやり、ジャックナイフで起きあがる。チャイナドレスの裾がふわりと捲れ上がり、目に眩しい赤いショーツの股間が大盤振る舞いされた。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「あら、はしたない」

乳房を弾ませながら突進してくる退魔師に不敵な笑みを送る。肩幅に足を開き、組んだ腕に肉果実を乗せる女妖怪は動かない。

「魔滅閃光掌！」

足を踏み出しながら腰を落とす、鎌鼬さえ起こりそうな素早い掌打が鳩尾にきまる。淫魔の時と同様、彼女も吹き飛ばない。仰け反りもしない。だが、インパクトの衝撃が全身に伝播する。肉の詰まった柔乳が、安産型の巨尻が、柔らかく熟れた腰回りが、肉の充実した太腿が、掌の接着面から放出される燐光の中でさざ波のように波打った。

「完全にきまったアルこれで……………え」

飛び退いて相手の様子からダメージを計ろうとした退魔師の顔が徐々に崩れ、眉目がハの字に歪んでいく。

「ふふ、どうかしたの？　今ので私が惨めだったらしく床に這い蹲るとでも思ったのかしら？」

女妖怪は何事もなかったように佇んでいる。

相手が一筋縄ではいかないことは分かっていた。だが、淫魔を消滅させたのと全く同じ攻撃を受けて平然としているのは完全に予想外だった。

第一話 敵に散らされる純潔

「まさか……効いてないアルか……」

「違うわ。発動してないのよ」

必死に考えてようやく板書した解答が不正解だと知らされた女学生に、正解を説明する優しい女教師みたいな顔で異形は言葉を継ぐ。

「あなたに嵌められた枷は、退魔力が身体から出て行くのを阻む呪いの道具なの」

「退魔力が出て行くのを防ぐ……呪いの……道具……」

メイリンの魔滅の掌打は、敵との接触の瞬間に自身の退魔力を叩き込むというものだ。故に、退魔力を相手に注ぎ込めないのならば、相手に効かないのも道理だった。

技をヒットさせる時に起こる燐光の爆発は、メイリンの退魔力が籠手で増幅される際の副産物であり、これ自体には異形にダメージを与える効果はない。

「そう。うふふ、困るでしょ？ あなたの場合は徒手空拳で戦うみたいだけど、退魔師ってというのは武器を使っても、私たちを倒す時の原理は同じですものね。こんなこともあるのかと準備したいたのが役に立ったわあ」

刀を使う退魔師だろうが、槍を使う退魔師だろうが、メイリンと同じく武器が敵と接触する瞬間に退魔力を注ぎ込んでダメージを与えている。それができなくなれば戦えない。敵はその弱点を突いていた。

（まずいアル……）

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

戦う手段がなくなつたとなれば逃げるのが一番だろうが、被害者を見捨てることもできない。淫魔を瞬殺した退魔娘は、どうしていいか分からず、ただ立ち尽くす。

いつの間にか、退魔拳師は女たちに囲まれていた。

「あらあら、見た目通り真面目な娘みたいねえ。不利になつたら逃げればいいのに、この子たちを見捨てられないからそれができない」

妖怪はずいつと顔を寄せてきて、にっこり笑つた。眉目を下げ、口の両端にえくぼを作るとても人のいい笑みだつた。

「本当にかわいい子。好きよ、あなたみたいタイプ」

それで油断したわけではなかつたが、退魔拳師としての訓練を重ねてきたメイリンも目で追うのがやつとの早業で片手を取られた。枕でも投げるように、女一人をあつさりとベッドの真ん中に放り投げる。

ドスンッ！

「くっ、調子にのるなアル……ふえ……！」

目を向けると、相手はそこにいなかった。左右も見渡したが、膨れっ面の日焼け娘がふたりいても、肝心の女妖怪が見当たらない。

「こっちよ、こっち」

立ち上がるうとした瞬間、背後に回つた女妖怪に上から肩を掴まれて強引に座らせ

られた。

(こいつ……とぼけた顔をしてるけど、やっぱり凄いやつアル)

「そうカツカツしないの。あの牡淫魔たちがやられちゃったのは残念だけど、あなたみたいな子と知り合えたのならそんなに悪くもないわね」

「何を言ってるアル……？」

「私ね、あなたと仲良くしたいなあっ、て思うの。だから、あなたに気持ちいいことをたくさん教えてあげる。人間の男なんかじゃ味わえない女の喜びをたっぷりとね」

力付くで肩を押さえながら、頬に頬をくっつけて囁いてくる。女妖怪の肌の温もりは人間のものと変わらない。温かかった。髪の毛か、体臭か、ラベンダーのいい匂いが鼻腔に入ってくる。

「ふざけるなアル！ このっ、このっ！」

ふりほどこうとするが、ふりほどけない。ほっそりとした流麗な腕なのにまるで、パワーシヨベルにでも押さえつけられている気にさせられる。

「んふふ、無駄よ無駄。幾ら鍛えていても、生身の女の子が妖怪の膂力に抗えるはずないじゃない。自由に退魔力を振るえれば話は違ってくるけれど、それが封じられているんじゃない？」

女妖怪は頬ずりしてきた。人間でも極上の部類に入る柔らかいもち肌が、若い退魔

師のきめ細かい頬肌を擦る。

「ひいつ、やめるアル、妖怪に……しかも女タイプの奴にこんなことをされても気持ち悪いだけアルよ！」

「それは残念……男の子なんか、これだけでオチンチンを硬くしながら喜んでくれるのに」

頬を離して囁くように言ってきた。粘っこい声が淫蕩に湿っている。

「私はラヴァンダ。ラベンダーの妖怪変化よ。これから宜しくね」

パチリとウインクした瞬間、妖怪からくゆっていたラベンダーの心地よい匂いが濃度を増した。

「ラベンダー……花の妖怪……アルか……」

「そうよ。あなたの名前は？」

「わたしの名前アルか……そんなの教える義理はないアル！」

ラベンダーの匂いと友好的な態度について教える気になったが、相手が人間の敵であることを思い出して突き放す。そんなメイリンをラヴァンダは駄々っ子を見る母の目で見る。

「そう。なら、勝手につけちゃうわね」

気分を害した風もなく、それまでと同じ気さくな調子で返事をしながら、胸元に両

第一話 敵に散らされる純潔

手を伸ばす。

「あ、何するアル！」

チャイナドレスの胸元が強引にはだけさせられ、真っ赤なブラも取り上げられる。ギョツ、タパンツ、ボヨヨンンツツツ！

観音開きになった胸元から、男を知らない若い乳房が転げ出た。重さと大きさを存分に見せつけながら、パンチングボールみたいに弾み、やがて収まる。

「はあ〜服の上から見ても凄いと思ったけれど、育っているのねえ。すごいわあ」脇腹とくつつかせながら両腕を固めつつ、ラヴアンダは手を伸ばして乳房を鷲掴みにする。退魔娘の肉の聖域が妖怪女の手と触れ合う。

ラヴアンダは、広げた十指を屈伸させ、柔らかさよりも弾力の勝る若い肉果実に指を食い込ませる。力を入れては乳肌を谷間を作り、力を抜いてははじき返される様は、まるでトランポリンで遊んでいるよう。

指の間から覗く鶉色の乳輪も隆起と沈没を繰り返し、球に近い清廉な色合いの乳頭も、ひっきりなしにお辞儀を強いられる。

「いやらしいおっぱいだわあ。そうだ、『じゃじゃ馬オツパイ』っていうのはどうかしら。こんなに我が儘そうなおっきな胸で、持ち主も男勝りの退魔師ちゃんなんですもの。どう思う、あなたたち」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

ベッドに腹ばいになりながら、メイリンが狼狽している様に意地の悪い笑みを向けていた日焼け娘たちが同意する。

「それいいですねー」

「ほんとほんと。ぴったりです」

あれほど眦をつり上げていた女たちが子供のようにつたつた笑った。

「馬鹿にするなアル！ わたしには、メイリンって立派な名前があるアルよ、『じゃじゃ馬オツパイ』なんて絶対に嫌アル！」

「そう、メイリンちゃん……ああ、私たちの間で最近噂の『閃光のメイリン』ちゃんね。若いのに妖怪や淫魔を何十体も倒しているという。なるほどお……それにしてもメイリン、なんていい名前じゃない。『じゃじゃ馬オツパイ』よりもそっちの方が似合うから、これは没ね」

(しまったアル……乗せられたアル……！)

ニンマリする女妖怪の様子が、子供騙しに引っかけた屈辱と羞恥を強くする。

「それじゃメイリンちゃん。これから、たつぷりイイコトを教えてあげるわね。妖怪は人間の敵だ！ とか叫ぶのが馬鹿らしくなるくらい、その頑固な頭をピンク色にしてあげる」

ルージユの唇を舐めながら、危機感をかき立てる艶声で宣言する。

第一話 敵に散らされる純潔

「くっ……わたしはお前なんかには負けないアル！ 後で、殺さないで玩具にしたことを後悔させてやるアル！」

「んふふ、威勢がいいのね。おっぱい丸出しでそんなことを言っても、私が嬉しくなっちゃうだけよ？」

「はっ、ああ！」

ラヴアングは淡雪めいた肌色の手で、パン生地を捏ねる要領で揉んでくる。下から上へ、上から下へ。女共通の性感帯である乳輪と乳首をさりげなく指で引っ掻きながら、何度も何度もしつこく形をひしゃげさせる。

その所作に荒々しさはない。マッサージ師が客の身体と対話するように身体が求めている刺激を揉み送る風に、乳房には一瞬たりとも痛苦を与えず、身体がふわふわしてくる仄甘い乳悦を与えてくる。

「ふ、フン！ こんなことをしても無駄アル……わたしは屈しないアル！」

（ごめんアル……でも、わたしは本当に負けないから……身体に触れられても、必ず逆転するアルから）

ここにはいない恋人に胸中で謝罪する。妖怪に敗北し、恋人だけに触れさせるべき聖域を蹂躪される嫌悪感と罪悪感をメイリンは感じていた。

一方的に乳悦を押しつけられているものの、喉奥では嘔吐感が渦巻いているし、ス

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

トレスで早鐘を打つ心臓も不快であった。

「ラヴアンドさん、コイツ抵抗してますよ」

「うわあ、『わたしは感じてない』って言い張る気なの?」

小馬鹿にした口調で、日焼け娘たちが口々にはやし立てる。

「うへえ、こんなにやらしいパイオツぶら下げて、滅茶苦茶に揉まれてるくせに、お高く止まっちゃってさあ」

「だっさ。歯あ食いしばってる時点であ、感じてるって暴露してるもんなのにさあ、頭悪いんじゃないの?」

「うるさいアル! 騙されて淫魔とえ……えっちしていた馬鹿女は黙ってるアル!」
敵に責められている苛立ちが手伝って、つい頭の軽さを声に換えている日焼け娘たちに叫んでしまった。

「ハア? さっき言ったのよく聞いてなかったのか? 知ってて抱かれてたんだよ。ひよっとして、アルアルふざけた語尾な上に記憶力ゼロの可愛そうな子なのアンタ」

「ほ……本当に……同意でしてたアルか……」

「そうよお」

手の平に乗せた下乳をタップンタポン揺らしながらラヴアンドが解説を始めた。

「昔と違って、今は淫魔や妖怪も節度を持ってるの。無闇に人間を殺したりしたら、

第一話 敵に散らされる純潔

退魔師が私たちを刈る大義名分を与えることになるでしょ？」

「でも、セックス中毒になる犠牲者がいるアル！」

加害者の癖に、教師の声音で諭そうとしてくる敵にカツとなり、ついにはしたない言葉を言ってしまう。

「私たちとのセックスは人間同士のセックスよりもいいから、確かに中毒になることもあるでしょう。でもそれを言ったら、ギャンブルに傾倒するとか、麻薬とか、趣味に入れ込むとか同様のケースがあるじゃない。合法非合法問わず、そんなリスクが内在しているものはたくさんあるわ」

退魔娘の言葉を受け流しながら同じ調子で言葉を紡ぐ。

「それに、人間が魔物と交わるなんて自然の摂理に反しているアル！ 人間の尊厳を傷つけているアル！ 絶対にあつてならないことアルよ！」

「それは、退魔師の価値観であつて、普遍的なものではないわ。人間社会でも、例えば、同性愛が認められるところがあれば、絶対に許さないところもある。向こうではいいことも、こっちではいけない、なんてケースはたくさんあるじゃない。それと同じよ。それを頑なに守ることで個人的な感情とか、受け継がれてきた習慣とか、もつと物質的な利益もあるんでしょうが、そんな束縛から解放されて得られる幸せもあるわけなの」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「詭弁アル！」

「どうかしらね……今はそう思っても、あの子たちみたいに、幸せならいいという考えもあるってことを、あなたも分かる日がくるわ」

女妖怪は、日焼け娘たちはタブーを犯さないことよりも、タブーを犯して得られる快感を選んだと言っているのだろう。そして、メイリンもいつかは同じ選択をしないと仄かしている。うそぶくラヴアンの瞳は僅かの曇りもなく、爛々と輝いている。間違いないと確信している風な顔だ。

（わたしは、そんな風にはならないアル！ 妖怪なんかと……！）

「そんな日は絶対に来ないアル！ って顔ねえ。うふふ、素敵よお。でも、あなたのオツパイはどうかしら」

弄るのをやめて手を離す。今まで女妖怪に弄ばれていた瑞々しい肉果実にほんのりと桜色が差している。転げ出された時よりも一回り大きくなり、横乳に浮かぶ静脈の青さがその濃さを増していた。

「うわあ、エロ乳がもつとエロ乳になってるじゃん」

「これって、胸で感じてたからこうなってるんだよねー」

淫魔とも積極的に交わっていたセックス狂いの若娘たちが訳知り顔で言ってくる。

メイリンを見る目はいじめっ子のそれだった。潔癖ぶっていても、結局は敵の手でだ

って感じるではないかと言っている風にメイリンには見えた。

「感じてなんかないアル！　これは、揉まれたりした刺激で勝手に起こるただの生理現象アルよ！」

「ふん……」

ラヴアンダが探るような目つきになったが、すぐになっこり笑った。

「感じる、なんて言葉が簡単に出るってことは、完全なウブっ子でもないようねえ。

結構、一人エッチとかしてるのかしら？　ん？」

恋人にも触れさせたことのない乙女色の乳首を我が物顔で摘み、クニクニと揉んでくる。ほっそりした指は手慣れた手つきで潰してきては、離して乳肉を元通りに戻す動作を繰り返す。

指から伝わる他人の体温が奇妙な心地よさを生み、潰される度に乳首の芯を叩くみたいなのピリツとした仄かな快感電気が生まれて消える。

女妖怪は乳首を絶妙な力加減で揉みながら、頬同士を密着させ、自分の頬からメイリンに女妖怪のぬくもりを送り込む。寝息のリズムで吐き出されるラベンダーの仄甘い呼気を鼻先にぶつける。

嫌でも女妖怪の存在感を自覚させられる状況だった。

「んっ……んふう……んん……」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

だと言うのに、徐々に強い悦楽を感じてきてしまう。

乳首に生み出される快感電気が少しずつ大きくなって触れられていない乳房へ伝わっていく。乳悦は乳房の体温を上げ、静脈の浮いていた肉果実が内側からカツカツと熱くなってきた。

「可愛い声になってきたわあ。ラベンダーのいい匂いに包まれながら愛撫されると気持ちいいでしょ？ 相手が妖怪でも、ひとりえっちするよりも快感でしょ？」

嘲笑めいた含み笑いを聞かせながら、自分を敵視する退魔師に乳悦を感じさせ続ける。

「こんなの……どうってことないアル……んっ……」

気を抜けば乳悦で緩んでしまいそうな尻を力づくで吊り上げる。眉間には美娘退魔師には相応しくない醜い縦皺が浮かぶ。顔面に力を入れているので、自然と前のめりになってくる。

血色のいい肌色をした頬にも乳房のように桜色が差し、目に見えるか見えないかの汗が数粒浮かんできていた。

「クスクスクスクス」

日焼け肌のふたりは揃って忍び笑いをしながら、俯きがちなメイリンを人差し指で差している。

「そういう割には、太腿がいやらしくヒクついてるわよ？ オマシコが切なくなってきたのかしらね」

お白州に引つ立てられた罪人よろしく開いていた太腿を、ぐっと開かせるラヴアンダ。太腿に引つ張られながらチャイナドレスの短い裾が捲れ上がり、真つ赤なハーフバックショーツが姿を現す。

「真面目な割には、派手な下着を着けているのね。赤い下着と言えば、そういうのを着けている女は欲求不満で男に襲われたい願望を秘めているって言うけれど、あなたはその口なのかしら」

「ち、違うアル！ わたしは、そんなふしだらな女ではないアル！」

幼い頃から退魔師の修行に明け暮れ、禁欲的な生活を送ってきたメイリンにとっては聞き捨てならない台詞だった。

年頃の娘であり、愛する恋人のいる身なので年相応のおしゃれとして可愛い下着を好みはするものの、見ず知らずの男に襲って欲しいなどとは思ったこともない。自分のあり方とはかけ離れた評価は、例えば妖怪であっても無視できない。

「あははは、冗談よ冗談。そんな下心がある子には見えないもの。まったく真面目なんだから」

気色ばむメイリンをいなしながら、最小限の動作でブチリとショーツを引きちぎり、

遠くへと放り投げた。

「あつ！ 何するアルか！」

ラヴアングは短い裾を大きくめくり上げ、退魔娘の陰部を完全に露出させてしまった。

「あー、コイツパイパンじゃん！」

「ホントだ、つるつるだよ。うわあ、ガキのマンコみたい」

平素の乳肌のようにツヤツヤした肌色をしており、肉土手の厚みは薄い。メイリンの薄い唇並みだ。それがピッタリ閉じていて、谷間の縦筋はシャーペンで書いた直線みたいに細い。まるで、幼女の秘所のような汚れのない居住まいである。

「あんまり触れられてないみたいね。もったいないわ、こんないところを放つておくだなんて」

敵の女妖怪は退魔師の無垢な大陰唇を下から上へなぞり上げる。

「や、やめるアル……んんっ……そ、そこはお前が触れていいところじゃ……ひゃあ……！」

触れているのが人間と変わらない指であるからか、相手が敵だというのに嫌悪感よりもむしろ痒い快感の方が勝っていた。

クリームを掬う力加減でなで上げ、かと思えば触れるか触れないかのタッチで擦つ

第一話 敵に散らされる純潔

てくる。膣口までずくと響いてくる愉悦と、表面のみをチリチリ炙る鋭い愉悦に交互に襲われ、次第に陰部の奥が熱を帯びてくる。

太腿も平静を保てず、ビクビクと粘っこく痙攣していた。とめようと力を込めても、陰部への愛撫で下半身が脱力してしまう。力が抜けている癖に、太腿の根本から膝までに走る痙攣は力強く、快感慣れした女が見れば快楽故の痙攣だと簡単に見破れるものだった。

「いやらしい痙攣だわ……ほら見て、あなたのぴったり閉じた可愛い割れ目が段々開き気味になってきたわよ……あらあら、間からとろっとしたお汁が漏れてきたわね」

粘っこく震えるムツチリした太腿に挟まれた陰部は、幼児が好物を見て涎を垂らすみたい。愛液を垂らし始めている。幼げな淫裂から流れる恥汁は会陰を伝い、真っ白いシートに音を立てずに落ちていく。少量は臀裂方面に向かい、尻に敷かれている『退魔装甲』の裾を汚している。

ラヴアングダは開き始めた淫裂に人差し指を潜り込ませる。

「んんっ……あああ……んんっ……や、やめるアル……っ」

退魔娘の肉聖域に入り込んだ妖怪の指は、膣の具合を確かめるように蠢いている。指の腹でぐにぐに押し込んで弾力を、深爪された爪先で肉襞の深さを計っている風にメイリンには思えた。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「若くて鍛えているだけあって、あなたのオマンコ凄くよく締まるわあ。お肉は少し硬めで、ヒダも浅めだけど初々しさが感じられて悪くない。でも……」

「くひいっ！　そ、そこは……ああ……指を早く離すアル！」

「脱力して腰の自由が利かないんだから、あんまりもがかない方がいいわよ。何かの弾みで、大事なココが破れちゃうかも知れないでしょ？　あなたが大嫌いな妖怪の指で処女喪失をしたいのなら別だけれど」

ルージュの唇をニマニマさせながら、処女膜に触れている指を軽く前後動させる。下手に抵抗できないよう、開いてる手で妖怪の指の快感を知り始めた陰部をあやすように撫でる。

首筋にナイフを当てられている気分だった。例えば、他の部位に本当にナイフを当てられていたとしたら、退魔師としての使命感と勇敢さをもったメイリンは怯みはしない。辱めを受けるよりは、自分が傷ついても人間としての、退魔師としての矜持を見せつけてやるところだった。だが、

（そこは……彼に捧げるところアル……）

愛する恋人と結ばれた時、自分が彼一筋だったことを知ってもらったための大事な薄膜なのだ。おいそれと破らせるわけにはいかない。

「ふん、大人しくなっちゃって……やっぱりここは大事なのね……んふふ、大事な

んだ」

ラヴアンダは妖艶に目を細め、アメシストの瞳が妖しく光る。日焼け娘たちが、にやにや笑い始めた。

「な、なにアル……？」

奇妙な静けさに包まれ、メイリンは胸騒ぎに襲われた。

「だったら、私が奪わせてもらおうわあ」

敵愾心が健在の退魔娘の背筋がゾクリとするほど粘い声で宣言すると、小声で呪文を唱え始める。

「何をいつて……ひあつ、何アル、お尻に何かが……！」

お尻の後ろで何かが芽吹き、それが臀裂に沿って成長してくるような感覚だった。それは棒状の熱い何かで、心臓みたいにドクドク脈打っている。

「んふう……はあ……ああ……」

それまで責める一方だったラヴアンダが官能的なあえぎを漏らし始めた。後ろからメイリンに抱きつきながら、ベッドのスプリングを利用して腰を弾ませ、しつこく下半身を擦り付けてくる。

「き、気持ち悪いアル……お尻の、んんっ……間が……熱い……」

それは臀裂の間に深く嵌まり込み、太陽の日差しみたいな熱感と鉄のような硬度、

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

力強い脈動を男性経験のない尻たぶに響かせていた。

「あはあ……もういいわね……準備はできたわあ」

ラヴァンダは抱き締めているメイリンの身体を少し持ち上げ、ソレを彼女の陰部の下から前へ通した。

「ひいつ、これは……！」

によつきりと前に生えてきたものを見て、退魔拳師が裏返った悲鳴を上げた。

「これはって、決まってるでしょ。オチンチンよ。オチンチン」

メイリンも医学書などで見て男性器の形状は知っていたが、ラヴァンダが見せつけている逸物は、紙に書かれた物よりもずっと生々しくて存在感の強いものだった。

「私のクリトリスを呪術で変えたものなの。どう、素敵でしょ？」

「うはっ、相変わらずいいモノしてますね」

「これこれ、こういうのが人間の男じゃ味わえないから、妖怪さんや淫魔さんとのセックスはやめられないのよねー」

日焼け娘たちは口々に賞賛し、初恋相手と向かい合った乙女のように頬を赤らめている。

（こんなモノのどこがいいアルか……）

皮の色こそ雪色をしていてグロテスクではないものの、竿は赤ん坊の腕みたいに太

第一話 敵に散らされる純潔

い。抱き締めながら前に通しているだけに、全長は二十センチを下らないだろう。

先端は水を吸った松ぼっくりみたいに膨れ上がっていて、カリ首の部分などはまるで開いたパラソルだ。肉端は皮をかぶってはず、赤紫色をしていて、室内照明の白い光を浴びて鈍い輝きを放っている。

男性器は女性器に挿入するものという前提を考えると、ゾツとしてくる。こんなモノが自分の大陰唇を割り開き、膣口をこじ開けて膣内に入ってくる場面を想像すると恐ろしさすら覚える。

しかも、これは敵の女の逸物なのだ。もしも相手が彼であれば我慢することもできるが、妖怪のものでは話が違う。

「さあ、入れちゃうわよ。メイリンちゃんの大事な処女膜を、これでブチツとしちゃいます」

斜めに反り返っていた逸物がピンと垂直に立つ。ラヴァンダは抱え上げていたメイリンの陰部を下降させ、逸物の先端を密着させた。

クチュ、みちりっ。

「や、やめるアル、そんなものを近づけるなあ！」

彼に捧げるために守ってきた純潔の危機に、退魔娘はじたばたともがくが女妖怪がガツチリ抱き締めているので逃げ出せない。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「ほうら、入るわよお、妖怪の私が、退魔師メイリンちゃんの初めての相手になるわよお」

からかうように言いながら、ミリ単位で退魔娘の腰を下げていく。妖怪に破瓜されようとしているストレスで愛液の分泌量が減少してきた陰部へ、妖怪の亀頭が入り込んでいく。

亀頭の先端は慎ましい陰部よりも一回り大きい。直径も、ぴったり閉じた淫裂の長さよりも五割増しだった。

そんな逞しすぎる異形の亀頭は、乾いてきた大陰唇を巻き込みながら膣口を目指す。「ひいい、やあ、入ってくる……熱いのが入ってくるアルっ！」

亀の歩みで突き進む亀頭が小陰唇と膣口もめくり上げ、とうとう処女膜に密着した。肉棒はお湯みたいなた熱さを撒き散らし、鉄みたいな硬さを思い知らせてくる。ビクビクと脈動する振動は、まるで早鐘を打つ心臓の律動だった。肉壺の拡張感も、逞しい男性器と合体していると意識せずにはいられない。

パシヤツ、パシヤツ。

不意にカメラのシャッター音が連続した。日焼け娘たちがスマートフォンで撮影会をやり始めたのだった。けばけばしいデコレーションを見るに自分のものなのだろう。部屋の隅には私物と思しき開いた鞆がふたつ転がっていた。

「や、やめるアル！ こんなところを撮るな！」

被写体は、妖怪女に処女を奪われようとしている秘部である。AV男優顔負けの亀頭が、乙女の鑑のような陰部に食い込む様子がフラッシュ付きで撮影されている。

「へへ、淫魔さんをやってくれたお返しだぜ。あんたが敵にオンナにさせてもらう場面を写メしてネットにばらまいてやる」

「あら、それはいいアイディア。決定的瞬間を確実に撮ってちょうだいね。それじゃ、いくわよ」

ラヴアングダはふたりが頷くのを見届けて、

「いただきま〜〜〜すっ」

「い、いやあつ、写真も破瓜も嫌アル、やめるアルっ！」

ブチリツツツツ！

パシャ！ パシャ！ パシャッ！ パシャッ！

女妖怪が喜色塗れの声を張り上げた次の瞬間、膣内が熱い衝撃で揺さぶられた。

シャッターを切る音が連続し、真っ白いフラッシュが目を灼く。

「ひぐううツツツ、ん、あああああ！」

退魔師の修行では感じたことのない強烈な痛苦に、流石の退魔娘も叫んでしまった。防御できない場所を傷つけられた衝撃もある。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

結合部から鮮血がツーツと垂れてきて、退魔娘の陰部に亀頭だけを埋め込んだ巨根の竿を伝っていく。勝ち鬨を上げる兵士のように、鮮血の筋を纏う肉棒は勢いよくビクビク脈動している。

「くっ……うう……」

大切な処女を奪われ、叫ばされたオナナ退魔師の顔に冷たいレンズが向けられては、シャッター音が響く。悔しそうに、痛そうに奥歯を噛み締めて眉目の尻を小刻みに上下動させている情けない表情までもが、何枚も何枚もスマートフォンメモリーに刻まれる。

痛みで総身がビクビク揺れるのをとめられない。征服された敗者のみつともなさが、彼女を抱き抱える女妖怪に伝わる。敗北した退魔娘の惨めな姿を、助けようとした日焼け娘たちが自分の意思で画像にしていく。

「おめでとう。これでメイリンちゃんも女の子からオナナにレベルアップね。記念のお写真はバッチリ撮れた？」

「えー、クッキリ写せましたよー」

日焼け娘たちは互いのデータをやりとりして出来映えを確認していた。

「ありがとう。じゃあ、今度は奥まで入っているとところを綺麗に撮ってね」

じゅぶ~~~~~~~~っじゅぶう、じゅぶぶぶぶっつ。

「あああ~~~~ツツツ！」

鈴を転がしたような凜とした美声に痛苦の色がベタ塗りされていた。ラヴアングダの手で下げられていく陰部は、鈍い水音を立てながら敵の逸物を呑み込んでいく。

恋人のペニスさえも通したことのない膣内が女妖怪の陰核ペニスの輪郭にそって拡張される。敵同士が性器で体温交換を行い、粘膜の肌触りを伝え合う。

「んふうう……ああ、いいわあ、やっぱり退魔師の子のオマンコは格別ね……はあ、食いちぎられそうだわ……処女っぽく生硬なのも堪えないっ」

肉体が鍛えられた処女膣は、まるで万力のように敵女のペニスに噛みついていて、ぬるぬるの愛液で濡れた柔肉の熱い抱擁は陰核ペニスをさらに猛らせ、その体積を膨張させた。

「はあ……な、中で広がって……んふう、はあ、はあっ……」

破瓜の痛みに心臓を鷲掴みにされているような圧迫感が加わり、一人前の退魔娘も苦しそうにあえぐ。膨張を続けながら進入を深めている肉棒の感触に、今にも内側から破裂させられそうな錯覚を覚える。

ゴツツ！ ぐりぐりぐり、ズンズン！

「ひぐううっ……はうっ……ああ、ああ……はあ、ハアッ」

「どう？ 子宮口をぐりぐり抉られて、ズンズン突かれるのは。痛い、苦しい？」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

ラヴァンダは子宮口と鈴口を密着させると、ベッドの弾力を利用して尻を弾ませて刺激してきた。

「ついさっきまで処女であり破瓜の痛みも収まっていなかった今、巨根で最奥を刺激されても痛苦しか感じない。」

「これがだんだん快感に変わっていくのよ？　それがオナナの喜び……オナナに生まれた一番の幸せなの。それを私が教えてあげるわ。退魔師なんかしてるだけじゃ、一生分からなかったことをね」

「……………っ」

「ん、なに？　なんて言ってるの？」

「消してやるアル……絶対に前を消滅させてやるアル！」

人間の敵に穢された敵意だけではない。愛しい恋人に捧げるはずだった処女膜と、そうすることで示したかった自分の想いの深さ。それらを敵に台無しされた憤怒。

メイリンは眦を吊り上げながら精一杯首を回し、ラヴァンダを睨みつけた。

「うふふふ！　純血を散らされただけじゃへこたれないってわけ。しかも、初体験の相手を殺してやるだなんて、なんて可愛いのかしら。掲示板にアップする時はこの台詞も入れてちょうだいね」

楽しそうな台詞の後半は、日焼け娘たちへ向けたものだった。見事な乳房を丸出し

にしたチャイナドレスの退魔娘が、破瓜の血を漏らしながら敵のペニスの三分の二ほどを啜え込んでいる様子をふたりが写真に収めたのを見届けて、言ったのだ。

「了解です。任せといてください」

同性が望まぬ初体験を迎えているのに、日焼け娘はまるで気にしていない。助けようとしたメイリンの方をすっかり悪者扱いし、辱めている。

「それじゃ、体位を変えましょうか。やっぱり初めては正上位がいいでしょ？」

同意を求めようで求めない台詞を吐き、ラヴァンダはペニスを軸にし、挿入したままメイリンを仰向けに寝かせる。

「犯すなら犯せばいいアル！ 後で何倍にも返してやるアル！」

目尻に悔しさと痛みの涙を浮かべながら、健気に眉目の端を吊り上げている退魔娘。

「楽しみにしているわ」

メイリンの鋭い視線と感情をにこにこ受け止めながら、彼女の胸元を戻す。

「これでよし。じゃあ、始めるわね。メイリンちゃんのウブオマンコの味、たっぷり味わわせてもらおうわ」

ぬちゅっ、じゅちゅっ、じゅぶぶぶ、じゅぶつ、にゅぶつ……。

退魔娘の両脇に手を突いて、腰を前後動し始める。

ゆっくりした抜き差しだった。パン生地を捏ねる様子を連想させる所作で、生硬な

膣内をほぐすように突いてくる。

退魔娘のオトコを知らない膣肉に包まれる妖怪の陰核ペニスは赤熱度合いを増していく。破瓜のせいで起こっていたひりつく痛みが呑み込まれ、肉棒の存在感しか感じられなくなっていく。

「気持ちいいわあ、すぐにでも射精しちゃいそう」

陰核ペニスを力強く脈動させながら、開発されていない子宮口をずくん、ずくと突いてくる。亀頭が気持ちよさそうに震える様子が伝わってきて、最奥に射精されるおぞましい予感を感じさせる。

「射精つて……クリトリスなのに精液を出せるというアルか……!？」

「そうよお。私のクリペニスは見かけだけじゃなく、機能も高性能なの。人間の女を孕ませることだってできちゃうわよ」

憎悪に燃えていた退魔娘が凍り付く。大切なものを幾つも奪われただけでなく、妖怪の子供を孕ませられたら、そんな女を誰が退魔師と、人間と認めてくれるだろうか？

「メイリンちゃんは、今日は危険日？ だったら、処女喪失したその日に懐妊させてあげられると思うんだけど」

女妖怪はいやらしい笑みを浮かべて見下ろしてくる。その顔と口調は、生意気な退

第一話 敵に散らされる純潔

魔娘が泣き叫んで許しを請うのを期待している風に見えた。

「ふんっ、孕ませられるなら孕ませればいいアル！ その分、むごたらしく殺してやるアル！」

身体と心を傷つけるだけでなく、自分の愉悦のために弄ぼうとまでしてくる女妖怪へ表情と声で、精一杯反骨心をぶつける。退魔力の行使を封じられ、膂力で抗うこともできない状況だが、退魔師としての矜持をエネルギー源にして気丈に振る舞うメイリン。

「ええ、楽しみにしているわ。だから、今はたっぷり出させてもらっわね」

ジユププツ、ニジユツ、ジユブツ、ジユズズツ！

ラヴァンダは猛然と腰を振り始めた。

退魔娘のムツチリとした健康的な太腿をVの字に広げながら、ベッドのスプリングも味方に付けて何度も下腹を打ち付ける。

裸の女妖怪の釣り鐘豊胸が、振り子のように前後に揺れて興奮で勃起した灰桜色の乳首が宙空に縦線の軌跡を描く。

メイリンのチャイナドレスの胸元も、陰核ペニスの突き込みリズムに乗って前後に揺れる。

（擦れるアル……乳首が、服の裏に……ッ）

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

ブラジャーを取り払われているせいで、チャイナドレスの裏側が乳首を擦る。タイトな退魔服の胸元が寝ても流れない若豊胸の輪郭を浮き上がらせ、その頂点に勃起乳首の形を見せる。

膣内は相変わらず痛みの方が大きかったが、退魔衣装と乳頭が擦れるとピリピリとした強い快感を感じさせる。それが膣の痛みを徐々に忘れさせ、頭の中を白ませていく。

「んふっ、くうっ、負けないアル、こんな奴にわたしは……！」

乳悦の心地よさに緩みそうになる顔を必死に睨み顔にしながら、歯を食いしばって呻く。

「いいわ、素敵よメイリンちゃん、あなたは立派な退魔師よ。妖怪なんか犯されても挫けない強い子だわ。あはっ、私を睨む顔なんて最高っ！ そんな子に膣内射精するなんて、考えただけで射精しちゃうそう」

メイリンが敵意を燃やすほどラヴァンダは喜色を強める。

膣内を蹂躪するペニスがはちきれそうなほど膨張していた。目の上でぶるんぶるん弾んでいる妖怪の巨乳が一回り大きくなり、灰桜色の突起が柱のようにそそり立つ。

「はあああ、興奮するっ、ねえ、私の乳首が勃ってるでしょ？ これって気持ちいいからなの。同じ女ですもの、分かるわよね。メイリンちゃんの硬めのオマンコの中で、

第一話 敵に散らされる純潔

爆発しそうな位にビクビク脈打ってる私のクリペニスは感じてくれる？　こんな
にギチギチ密着してるんだもの感じてくれないはずはないわよね？」

ラヴァンダはこれまで見たことのないほど嬉しそうに腰を振っている。目は熱情に
潤み、ウエーブのかかった前髪が汗の浮いた額やこめかみに貼り付いている。同性か
ら見ても艶めかしい。

日焼け娘たちがシャッターを切る度に、熟れた妖怪の全身に差す桜色が濃くなつて
いく。

「メイリンちゃん、私を感じてえ、倒そうとしたこの私をいっぱい感じて……はああ
あ、出るわっ……んっ、私のクリペニスすっごく熱くて心臓がゾクゾクする位に気持
ちよくなってる……はああ、この気持ち、メイリンちゃんに全部ぶつけてあげる……
私の子種汁、たあっぷり受け取って！」

まだ硬さの残る処女膣の最奥に、敵の女はぶっくり膨れた肉松ぼっくりをぶつけた。
バシインツツ！　ドグンツ！　ドブドブドブドブウウウウ！
「んぐうつつつ、ああああ！」

陰部同士が衝突する肉音が響いた矢先に、膣内に熱い奔流が解き放たれた。密着す
る子宮口に、次々と濃厚な子種汁が流れ込んでくる。ドクンドクンとペニス全部を震
わせながら噴き出してくる種汁は熱湯のように熱くて、粘着シールみたいにネバネバ

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる



していた。

「んああああ……わたしの中に……妖怪の……汚い精液が……」

一瞬、精液を注がれる女の本能でとろんとしたが、すぐに我に返って敵への憎悪を燃やす退魔娘。

「はああああ、気持ちいい……強くて気丈な退魔師の女の子に中出しするのは最高だわあ。メイリンちゃんの子宮口、私の精液で溺れちゃってるわよ。まだまだ硬くて溝の浅いオマンコのお肉も、私のどろっどろ精液ですっかり冠水しちゃってるの。分かるでしょ？」

そんな彼女の表情の変化を見ながら、敵の女はメイリンが膣内射精されていることを意識させる言葉を投げてくる。

「うるさいアルっ、今に見てるといいアル！」

膣内が異形の繁殖汁で満たされる不快さに奥歯を噛んで耐えながら、親しげに話しかけてくる敵に強く言い返す。

「うふふ、妖怪に中出しされたのにしょんぼりしないのね。本当に強い子なんだから。そんな子のオマンコには、是非とも私の精液を染み込ませたくなるじゃない」

ぬちゅっ……にじゅっ……ぬぷっ、じゅぷぷぷ……。

ラヴァンダは射精しながら緩慢に腰を振る。退魔娘の処女膣で摩擦快楽を貪るとい

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

うよりは、膣内を満たす精液を膣肉に塗りたくるのを第一に考えた所作だった。

引き抜く度に精液がこぼりと掻き出されるが、その量は一向に減らない。女妖怪が射精を続けて常に新鮮な種汁を膣に補充しているからだ。

パシヤツ、パシヤツツ！

並外れた陰核ペニスに蹂躪されている退魔娘の性器の様子を被写体に、日焼け娘たちは写真を撮り続ける。

「いいなあ。こんなに出示してもらえて……羨ましい……」

「こつちもラヴァンダさんのクリペニスで嵌めて欲しいっ」

「ええ、いいわよ。この子のオマンコから私の精液臭さが抜けなくなるまで射精したら、あなたたちも犯してあげる」

歓声をあげる娘たち。一方のメイリンは眉根の縦皺を深くした。

（まだまだ犯す気アルか……でも負けないアル……絶対に、今日のツケを払わせるアルよ……！）

退魔娘はありつたけの激情を視線に乗せて女妖怪を睨みつける。だが、それでもラヴァンダは不敵な笑みを崩さなかった。

第一話 娼婦退魔師の初仕事

ラブホテルのベッドの上で、退魔娘と女妖怪が交わっていた。

「んはあつ、気持ちいいわ！ メイリンちゃんのオマンコは最高よ！ ああああ、また出ちゃう……メイリンちゃんのキツキツオマンコに包まれながらまた精液出ちゃううー！」

正上位の体位でメイリンを犯しているラヴァンダが喜悦満載の嬌声を張り上げる。退魔娘の股間は女妖怪が何度も吐きだした精液でぐちゃぐちゃになっており、処女だった陰部は栗の花の臭いで覆われている。

「だ、出すなら出せばいいアル！」

もう何度も精液を注がれているメイリンだったが、常人ならば汚辱感で狂うか、あの日焼け娘たちと同じく異形に靡いてしまってもおかしくはないのだが、退魔拳師は復讐を諦めることなく歯を食いしばっていた。

「それじゃ、遠慮なく出させてもらおうわ。ねえ、そこの彼もよく見ているね。あなたの彼女が敵に中出しされるところを」

「え……ゆ、優!？」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

ラヴアンドの視線の先には、愛する恋人が佇んでいた。

「なんでこんなところに……」

「はあん、あああ、出るわ、また出るっ、メイリンちゃんのキツキツオマンコ気持ちよすぎるから、また孕むくらい出ちゃう……彼女が妖怪に孕ませられる瞬間を彼氏くんも見届けてっ！」

「や、やめるアル！ 優の前で、あ、あ、ああアアア！」

いくら膣内射精をされても取り乱さなかった退魔娘が、今度というこんどは狼狽した。慌てて女妖怪を引きはがそうとしたが、相手は石像のように動かなかった。

だと言うのに、膣内をしつこく研磨していた亀頭は子宮口に嵌まり込み、射精前の強烈な振幅をし始め、

どびゅううう！ どぐっ、どぶどぶどぶつつっ！

精液を浴びすぎてドス白くなった退魔師の子宮口に、新しい精液が注ぎ込まれる。初めに浴びせられたのと質も量も変わらない。本当に一回で妊娠させられそうなどろどろの精液が子宮への扉を穢し尽くす。

「ああ……あはあん……いいわあ……彼氏の前で彼女に中出しするの最高！ メイリンちゃんも、彼氏の前で敵に浮気中出しされるの気持ちいいでしょ？」

「いや……違うアル、これにはわけが……ああ、優……」

第二話 娼婦退魔師の初仕事

二十歳ほどの若い優男は、汚物を見る目でこちらを見ている。自分を軽蔑し、永遠の離別を願っているような、見限ったのが一目で分かる、そんな表情。

それは、胸を鋭く痛ませた。破瓜の時の屈辱や肉体の痛みをずっと越える魂に響く痛苦だった。

「そんな目で見ないで……わたしを見捨てないで……」

どんなに穢されても音を上げなかった退魔娘が、正上位で精液を注がれながら顔をくしゃくしゃにする。目からボロボロ流れる涙が、顔とシーツを汚す。

「なかないでメイリンちゃん。私がもっと中出ししてあげるから。彼氏くん嫌われちゃってよかって思うくらい、オマンコしてあげるから」

膣内でまた白濁の本流が解放される。

「はあああ……ああ、優……」

その寝言でメイリンは目を覚ました。

涙で頬を濡らしたまま上体を起こして周囲を見渡す。女妖怪に犯された部屋でなく、起臥に使っているホテルの一室だった。

「あ……夢あるか……よかったアル……優に見られてないアル」

恋人に見捨てられたことが現実でないのを知り安堵した時、

ピリリリリリリリリリ！

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

組織から支給されている携帯電話が鳴った。ディスプレイを見ると、愛する優からだった。彼も他の任務についている。今は午後七時を回ったばかりなので、一段落ついて電話をかけてきたのかも知れない。

普段なら喜んでとるところだが、敵に汚された負い目がまったをかける。

（でも、優はわたしが犯されたことを知らないはずアル……）

敵に犯された心的ダメージは、最悪の悪夢を見せるほど深刻だった。心細い。すぐにでも彼に抱き締められたい。汚れた自分を許してくれるかは分からないが、できれば慰めて欲しい。

（今だけ……今だけ勇気を分けてもらうアル……あいつを殺したら、全部打ち明けるから……）

よりにもよって敵に純潔を奪われた失態を隠すのは彼への裏切りに思えたが、後から打ち明けるといふ決意を免罪符にしようと思ひ、電話に手を伸ばす。

彼の声を聞きたい、聞けばきつとこの困難に打ち勝てる力が湧いてくる。そんな感情に背中を押され、メイリンは通話ボタンを押した。

「もしもし……優？」

『うん、俺。ひよつとして寝てた？』

「ううん、ちよつと考え事をしていただけアル。電話をとるのが遅くなつてごめんア

第二話 娼婦退魔師の初仕事

ル」

『いいって。それより、調子どう？ 任務は果たさせそうか』

屈託のない声は普段通りで、聞いているだけで落ち込んでいた心が救われる気がした。

「ちよつと手こずっているけど、わたしにかかればどうってことないアルよ」

彼の言葉に元気を取り戻した退魔娘が、いつも聞かせているみたいに勝ち気な返事をする。

『そっか。こっちももうすぐ終わりそうだ。一緒に頑張ろうぜ。終わったらまたどっかに遊びにいこうな』

「うん、分かったアル。今度はどこに行くアルか？」

『そうだな……』

リリリリリリリリリリリリ！

和やかに会話が進んでいたと言うのに、セットしていた目覚まし時計が鳴り響いた。『なんだこの音？ どうかしたのか？』

「あ、ごめんある。出かける時間にセットしていた目覚まし時計が鳴りだしたアル」

『ああそうか。分かった。それじゃ、電話を切るよ。気をつけてなメイリン』

「ありがとうアル。優も頑張るアルよ」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

名残惜しさたつぷりで電話を切る。

そして、無粋な目覚まし時計を止める。

「もうこんな時間に……折角、優と話していたのに……！」

忌々しげに吐き捨てる、メイリンは身支度を整えて部屋を出た。

彼女は淫魔との売春に出掛けるのだ。

「おおつ、本当に来たぞ。本当に本物の『閃光のメイリン』だ！」

退魔師の『退魔装甲』を纏って現れたメイリンに歓声が浴びせられる。外見は退魔任務の時の正装だが、今は首輪と手枷が加わっていた。加えて、枷に退魔力を吸い取られ、ラヴァンダに食べられてしまったせいで、『退魔装甲』は真っ白に脱色してしまっている。

指定されていたシティホテルの一室で出迎えたのは、半袖Yシャツとスラックスの四十代位の男だった。

髪は短いものの年齢のわりにはふさふさで、頬は大福でも含んでいるみたいに膨れている。喜悦が満載の細い目を能面のようにたわませて、ニコニコとひとのよさそうな笑みを絶やさない。

内蔵脂肪の豊かさを見せつける太鼓腹が目を引くが、手足も相応に太めだった。

第二話 娼婦退魔師の初仕事

愛想のよさがウリのタレントか、どこにでもいそうなマイホームパパみたいな感じである。

「本日はご指名誠にありがとうございました。ふつつかものですがどうぞよろしくお願いいたします」

小躍りする男の前で三つ指をつき、慇懃に頭を下げる。

(この気配……こいつ淫魔ある……)

「ん〜。そんなバカ丁寧なしゃべり方じゃなく、いつものアルアル口調でいいよ。でないと、『閃光のメイリン』ちゃんをお金で買って、エッチする醍醐味が薄れちゃうじゃない」

「分かりましたアル……これでいいアルか？」

中年は満面の笑みで頷いた。

メイリンが淫魔に身体を売るのはラヴァンダの命令だった。

捕らえた退魔娘につけた枷はセックス相手の精気を吸い取る機能を持っており、それで淫魔の精気を集めて来いという。メイリンが収集した精気はラヴァンダが食らい糧とする。

退魔師としても女としてもとても許容できない命令だったが、メイリンにもメリットがあった。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

それは、集めた精気を自分の力に変換できることだ。

枷のせいで退魔力を行使できない状況だが、多量の精気を収集して自分の退魔力に変換させて利用すれば、自力で枷を破壊することもできるはずなのだ。

それはラヴァンダも気づいており、しつぺ返しの予防策として枷に呪いをかけていた。決まった時間になると、メイリンの身体がラヴァンダの元へ瞬間移動するというものだ。故に、ラヴァンダの手の平の上で彼女を出し抜かなければならない困難もあるのだが。

ともあれ、メイリンはそんな思惑でラヴァンダに教わった通りに娼婦の真似事をしている。処女を奪われてから今までの数日間、言葉遣いや仕草を教え込まれるだけでなく、身体も淫らに調教されてきており、「メイリンちゃんなら上手くいくわ」と太鼓判を押されてしまっていたので備えはできているのだが、惨めで屈辱的であることに変わりはない。

「ところで、これって本当にメイリンちゃんなの？」

男はスマートフォンを見せてくる。そこには、ラヴァンダに犯された時に撮影された写真が表示されていた。コメントも付記されている。

どこかの画像掲示板なのだろう。男女のセックスシーンの動画がけたたましく再生されている小さなコマに囲まれた掲示板の中に、陰核ペニスの竿に破瓜の血を垂らし

第二話 娼婦退魔師の初仕事

ているところを撮られた写真には、『負けて処女も奪われたけれどメイリンの心は決して折れない!』とあった。

睨み顔で正上位で犯される画像には『ラベンダーの女妖怪なんかには絶対負けない!』と嘘ではないが空しい言葉が書かれている。すぐ下には陰核ペニスの嵌まり込んだ結合部が白濁の涎を垂らしている画像が貼り付けられている。

「わたしアル……」

「そうかそうか。たつぷり犯されたんだねえ。ラヴアンダさんの陰核ペニスはどうだった? 本当はちょっとは気持ちよかったんじゃない?」

「そんなことないアル! あんなので気持ちよくなるはずないアル!」

馬鹿にした発言についカツとなったが、すぐに立場を思い出して謝罪する。男は気分を害した風でもなく、笑って娼婦の非礼を許した。

「いいっていいって。おじさんが失礼なことを聞いたのがいけなかったんだから。それにしても、ふふ、嬉しいなあ」

いやに朗らかに笑っているのが不気味で、メイリンはおずおずと尋ねた。

「お客様……何が嬉しいアルか?」

「いやね、新進気鋭の強力な退魔師であるメイリンちゃんの処女をもらえなかったのは残念だったけど、初めて女の快感を教えるのが自分だと分かったら、何だか心の底

から嬉しくなつてきてねえ。ラヴァンダさんのペニスじゃ感じなかったんだろ？ お
じさんが女の喜びを教えてあげるよ」

「何を言ってるアル…… お客様は、わたしで性欲処理するんじゃない」

「もちろん、性欲を解消させてもらうけど、だからといって強引に犯すつもりはない
んだよ。おじさんは退魔師の女の子と一緒に気持ちよくなって、退魔師家業を真面目
にしていたんでは絶対に味わえない女の幸せを教えてあげるのが大好きでね。知り合
いの口の悪い奴は『調教淫魔』なんて俺を呼ぶけど、結構いいあだ名だつて自分は思
ってるんだよねえ」

にこやかに不穏当なことを言ってくる中年淫魔に、メイリンはいい知れない不安を
覚えた。相手に身体を開いて満足させるだけでは、その程度の心身の汚れを甘んじる
だけでは済まないのではないか、自分はもっと深みに墮とされるのではないかという
漠然とした思いが湧いてきて、気持ち悪く頭の隅にこびりつく。

「よし、おしゃべりはこの辺にして楽しい時間を始めようか。ズボンを脱がせて俺の
ペニスを引きずり出してよ」

三つ指を突いていたメイリンの目前で仁王立ちし、腰をそらす。股間は既にドーム
状に膨らんでいる。自分を買って犯すことをどれほど心待ちにしていたのかを嫌でも
思い知らされる。

第二話 娼婦退魔師の初仕事

「はいアル……失礼しますアル」

膝立ちになったメイリンが淫魔の股間に顔を近づける。

本体を露出させたわけでもないのに、ペニスの臭気と熱気がズボンの布を突き抜けていた。甘酢を混ぜた栗の花臭が鼻に入ってきて、弱火の熱波めいた熱さが顔面の体温と混じり合う。

カチャカチャ、ズツ、ズリ~~~~ツツ。

ベルトを外して下着ごとズボンを下ろしてやる。股間のドームが邪魔だったが痛みを与えないよう丁寧に処理した。

「ありがとう。どうだい、おじさんのチンポは。ラヴァンダさんのクリペニスにも負けないだろう？」

得意げに言うだけあり、中年の逸物は太さも硬さも亀頭の出来具合も、セックス慣れた日焼け娘の歓声を浴びた女妖怪のものにひけをとらない。しかし。

「はいアル……お客様のオチンポは素晴らしいアルよ……」

驚きを隠せない上擦り声で、娼婦らしく褒める退魔娘。その目は信じられないとばかりに見開かれている。

（すごくグロテスクある……あいつのオチンチンの方がまだ可愛かったアル……）

ムダ毛の処理された太った太腿の間にぶら下がる無毛の逸物は、女妖怪のものとは

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

色合いが違った。

皮を少しも被らず、尖った肉塊と言うに相應しい亀頭は毒々しい青紫色をしている。竿もどぶ水で染めたみたいに気色悪く、ばらまかれたミミズがのたくるように浮き上がっている数々の太い血管も、ドス黒さの強い紫色をしていた。

「気に入ってくれてよかった。じゃあ、これをフェラしてね」

「ふえ、フェラ……フェラチオ……アルか……？」

ラヴアングダに教え込まれていたのでフェラチオも可能だ。「これならどんな男の相手もしてもらえるわ」と、フェラチオ技術も折り紙つきだった。

（こんな気持ち悪いものを、口に入れないといけないアルか……）

グロテスクな外見に加え、ズボンと下着に包まれていた時とは段違いの熱波が鼻に染み込んでくる不快な感触。こんなものを口にするのは、残飯を食べるのと大差ないではないか。

「ん、どうしたの？ できると聞いていたんだけどなあ」

友好的だった声に、若干不機嫌な色が混じる。それを感じたメイリンは慌てて首を振った。

「済みませんアル、お客様のオチンポがあまりに凄かったので見とれてしまっていたアル。今、喜んでフェラさせてもらいますアル！」

第二話 娼婦退魔師の初仕事

売春を放棄することは、ラヴアングダを倒すチャンスもなくすのに等しいことを思い出し、メイリンは嫌悪感を意識から追い出す。

（あいつに復讐するためには耐えるしかないアル……）

意を決した退魔娘は、勢いよく天井を向いている亀頭におずおずと唇を寄せる。

「若い退魔師の子にそこまで褒められるなんて嬉しいなあ。あ、最初は亀頭からお願いいね。俺がいろいろ言ったら根本までしゃぶってもらおうから」

上目遣いでコクンと頷く。お団子型のヘアクリップで纏めたセミショートのさらさら髪が静かに揺れた。

「いただきますアル」

まだ乙女性を感じさせる薄い唇を目一杯開き、並びのいい真っ白な歯を見せると、亀頭をパクリと啜え込む。

唇の裏側と高いカリの裏側を密着させる。亀頭からくゆる熱と臭いが瞬く間に口内に充満。思わずええきそうになったが、それを必死に堪える。

「よしよし、いい子だ。その調子で続けてね」

上手に芸ができた飼い犬を撫でるようにメイリンの頭を撫でる淫魔。下劣なものにこんなことで褒められても、嬉しいどころか反骨精神しか感じない。だが、目的のために精神力を総動員させて悪感情を押し殺し、従順な娼婦を演じる。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる



第二話 娼婦退魔師の初仕事

唾液をたつぷり浴びせ、頬をへこませる。窄めた唇で亀頭を包み込みながら前後に頭を振り、淫魔の牡肉塊を磨き上げる。

初めはゆっくりと、初対面の唇と亀頭をなじませるように行き、徐々にスピードを上げていく。

『いいねえ、思っていたよりずっと上手だよメイリンちゃん』
「えっ？」

不意に頭に響いてきた声に驚き、思わず口を離してしまった。メイリンの唾液に濡れた逸物が口から飛び出し、勢いよく振り返ってへその間近でとまる。

「はっはっは、びっくりさせて悪かったね。おじさんがメイリンちゃんの脳に直接話しかけたのさ。いわゆるテレパシーというのが使えてねえ。フェラしてもらいながらお話するのが俺は大好きだから、キミにも相手をしてもらおうよ。さ、フェラを再開して」

一方的に肉声で言い放ち、促してくる。拒否は許されないメイリンは命令に従う。
『よしよし。ところで、おじさんのペニスの味はどうかな？ しゃべらないで思うだけでもいいからね』

（に、苦しよっぱいアル……）

答えながら、大変なことになったとメイリンは思った。なにしろ本音を言えば、グロテスクなペニスなど相手にしたくないのだ。その感情をテレパシーに乗せてしまえ

ば淫魔はきつと気分を悪くするだろう。そうなれば、ここまでの努力が水の泡であり、今夜の売春が無駄になればそれだけラヴアンダを倒すのが遠のく。

『今は不味いだろうけど、だんだんとそれが美味しく感じられるからね。頑張るんだよ』

本音を看破されたかとドキリとしたが、淫魔は屈託のない笑みを浮かべている。見破られてはいないらしい。

（はいアル。今夜中にお客様のオチンポが美味しく思えるよう、誠心誠意尽くさせていただきますアル）

阿るように台詞の思念を送り、亀頭をしゃぶりながら上目遣いで淫魔を見る。彼は機嫌よく頷いた。

こうなれば、淫魔との会話に積極的に応じて本音が漏れる暇などないようしなければならぬ。一刻も早くこの淫魔から精気を奪い取り、今夜の仕事を終わらせなければと心の底でメイリンは思った。

両手を伸ばして、中年の太った太腿の裏側を握る。それでバランスを取りつつ、唾を散らしながら頭を振り、熱烈に亀頭を擦りあげる。濡れ舌はカリの裏側、皮の繋ぎ目を舐め回し、小便を排出する場所である鈴口をほじることさえ厭わない。ラヴアンダに教わった知識と技術を総動員して敵の淫魔に快感奉仕を行う。

第二話 娼婦退魔師の初仕事

『ああ、いいよ、実にいい。噂のメイリンちゃんが、こんな娼婦か夫を愛する妻みたいなことをしてくれるなんて嬉しくて堪らないよ。おじさんのチンポはもう凄く熱くなって、とても気持ちいいよ』

（はいアル。お客さまの立派な亀頭はメイリンの口の中で燃えてるように熱くなっているアル。ビクビク脈打って、とても男らしいアル）

『うふふ、嬉しいねえ。よおし、そろそろ根本までしゃぶってくれるかい？　メイリンちゃんのペースでいいから。いつでもおじさんをイカせていいからね』

退魔娘は亀頭を啜えたまま、上目遣いで頷く。カリ首で止めていた頭の振りを、今度は根本まで延長させる。

亀頭と竿に唇を強く吸い付かせつつ、ペニスの根本から亀頭の先っぽまでを磨き上げる。

「チュプツ、ブチュ~~~~ツ、チュルルツ、ぷはっ、チュプ、チュ~~~~ツツ、へあ、チュプププツ、あふ」

扱くだけでなくバキュームも織り交ぜる。亀頭だけを口に残した時と、根本に達した時には必ず肺活量の限りに吸い上げ、唇で肉棒を磨いている間もリズムカルに吸い上げる。

「いいいいいよ、もっと吸って、唇をいやらしく吸い付かせて扱いて！」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

淫魔は欲望の丈を声に出す。若い娼婦退魔師の頭を掴み、手の平と尻たぶ、太腿を気持ちよさそうに痙攣させる。

男が満足していることを感じたメイリンは、フェラチオの振動でゆさゆさ揺れていた陰嚢に片手を伸ばした。

若干縮こまっているものの、肉袋の体積は一掴みほどもある。中に入っている睾丸などはうずらの卵位はあるだろうか。

メイリンは熱情的なフェラチオを行いながら、陰嚢をやわやわと揉む。ラヴアングには陰嚢がないものの、適切な力加減は教えられていたのでそれを実行する。

陰嚢の肌触りは柔らかく、温もりに溢れている。女を金で買う淫魔のものなど握りつぶしたくなるのだが、その気持ちを必死に押し殺して健気に尽くす。

「んむ、んむっ、チュ、プウウウ！　ぷはっ、すーはー、あむっ、チュプ、チュパ、プチュ、プチュ~~~~ッ！　えお、んむっ」

敵である退魔娘にフェラチオさせ、陰嚢まで揉ませている淫魔は背筋を粘っこく震わせながら眼下の彼女に告げた。

「おおっ、出すよ出すよ、メイリンちゃん、こぼさず飲むんだよ、おじさんの……淫魔の種汁を退魔師のメイリンちゃんがごくごく飲むんだ。それが今のキミのお仕事なんだからね……っお！」

第二話 娼婦退魔師の初仕事

『はいアル！ お客様、いっぱい出して下さいアル！ メイリンは全部飲ませてもらうアル！』

「よし、おじさん頑張っちゃうよお、思いつきりドビュドビュしてあげるからね…
…んっ、おおおオオオ！」

根本まで口に含んだ状態で、正面から亀頭をべろべろ舐めていると、手の平で愛撫していた陰囊がみるみる縮こまっていった。

肉棒は口の中で跳ね回り、唇でガツシリ掴んでおくのに苦勞するほど。ビクンビクンという射精間際の脈動には、唇だけでなく口内をも揺さぶられている気にさせられる。

もう亀頭の膨張が限界だと思ったメイリンは、頭をスライドさせてカリより上だけを啜え、思い切り吸い上げた。

ドビュンツ、ドクドクドク、ビュ~~~~~！

「んぐうううう、えぐっ、んむう！」

跳ねる亀頭が種汁を撒き散らす。卵白よりも粘り気の強い精液は、喉奥、口蓋、頬の裏、歯茎、真っ白い歯、舌の上など口内中にへばりつく。粘液の付着地点は汁臭の発信源となり、口の中はこれまで以上に濃厚な牡の臭いで満たされる。

「プチュツ、ごくっ、んっっっ、チュウウウ~~~~~！ ゴクンゴクンッ」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

精液を噴き出す亀頭を吸いながら、射精汁を呑み込む退魔娘。拒否は許されない状況であり、嫌悪の感情さえも軽々しく出せない現状なのだ。淫魔の客が喜ぶように奉仕して、下手なことを考える前に口淫を終わらせなければならぬ。

その一心で、退魔拳師は唾液を混ぜて牡粘液の粘着力を削ぐことに苦心し、喉をうごめかせて飲み下すのに必死になる。嫌な顔をして怒らせてはいけないので、上目遣いの微笑みは絶やさぬ。

「ふふ、おじさんなんかの汚い汁をそんなに一生懸命飲んでくれるなんて嬉しいねえ。しかもキミは『閃光のメイリン』ちゃん。何体もの淫魔を駆っている退魔師ちゃんなのに」

本来ならば敵同士であり、自分などは簡単に滅ぼせる美娘にフェラチオ奉仕させている倒錯感が快感になっていくらしく、巨根はなかなか萎えない。いつまでも勃起したまま口の中に居座って、断続的に汚液を吐きだしている。

メイリンは鼻息を荒げて呼吸をしているのだが、それで足らなくなつて口で息継ぎもする。すると淫魔はその瞬間を狙い澄まして射精してくる。

「ほらほら、お客様の精液はこぼしてはいけませんよ。全部飲み干さないかね」

（は、はいお客様、申し訳ありませんアル。んぐんぐっ）

口の端からドロツとした粘糸を垂らすも、すぐに肺一杯に息を吸い込んで精液の嚙

第二話 娼婦退魔師の初仕事

下に勤しむメイリン。笑顔を忘れず、汚辱感をひたすら隠して淫魔に献身する。

頬をへこませながら甲高い吸引音を奏で、若い喉をせわしなく前後動させている退魔娘を見下ろす淫魔は、ひとのいい笑みを浮かべており、とても満足そうに見えた。

と、メイリンは少しずつ身体に力が湧いてくるのを感じた。

退魔力を放出して戦う時の充実感めいた心地よさが、身体の隅々にぼんやりと行き渡っているような感覚。

理由に思い当たり、テレパシーとして送信されるのを恐れ、心に思わずに手枷を見つめると案の定、ぼんやりとした白光を放っていた。

絶頂した淫魔から精気を吸い取っている証である。

娼婦の真似事をして精気を集める仕事はこれが初めてだったが、これでラヴァンダの説明が間違いではなく、自分に逆転のチャンスがあることが証明されたのだ。

（美味しいアル、お客様の精液、苦くて青臭くてどこにでもべったり貼り付くアルが、それがとてもいいアル！）

もつと相手を絶頂させて精気を搾り取りたくて、メイリンは喜悦の声音のイメージを男に送る。

「おやおや、もうそんなふしだらなことを言うなんて、『閃光のメイリン』ちゃんは淫乱の素質があるのかな」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

目を細めて頬を吊り上げ、優しく頭を撫でながら穏やかな口調で言う。

「でも、フェエラはもういいよ。十分楽しませてもらったからね。今度は下のお口で啜え込んでもらおうか」

唾液と精液を纏った萎えない逸物を引き抜くと口を開かせ、すっかり精液を飲み干したのを確認してから、淫魔はメイリンをお姫様抱っこで抱え上げた。

「ふうむ、あまり濡れていないねえ。じゃあ、これを使おうか」

仰向けに下ろしてショーツを脱がせ、片手でまんぐり返し気味に太腿を抱えながらまじまじと陰部を観察して言うてくる。

「申し訳ありませんアル、でも膣の中は潤っているはずですから……このままでも……」

お客にいつまでも太腿を抱えさせるわけにはいかないので、自分で両膝の裏を抱えながらメイリンはおずおずと口を開いた。

十分濡れていないままで挿入に及べば、男はともかく自分は痛くて堪らないだろうが、淫魔ならばそういうプレイの方を好むはずだ。自分だけ気持ちよくなり、敵である退魔師には苦痛だけを与えた方が自尊心と性欲が満たされるだろうから。

本当ならば淫魔に犯されるのは嫌であるが、異形の子供を孕むのを避けるには危険日がない内にラヴァンダを倒し、こんな生活から抜け出さなくてはならない。なり

第二話 娼婦退魔師の初仕事

ふり構ってはいられないのだ。

「いや、このままセックスをしても面白くないからね。さっきも言ったが、俺は本当にメイリンちゃんと一緒に気持ちよくイキたいんだよ」

予想に反した答えをした淫魔は、枕元に置いてあったボトルをメイリンに渡す。

「ほら、ローションだよ。これで自分のオマンコをぬるぬるにしてくれるかい？」

「……はいアル」

受け取ったメイリンは中に詰まっていたピンク色の粘液を手にとり垂らすと、まんぐり返しの体勢を維持しながら秘所に塗り始めた。

ラヴァンダとの性行為で肉付きを増し始めた大陰唇が、メイリン自身の手でピンク色に塗れ光っていく。指を潜らせて、小陰唇と膣口、そして膣内にも十分な量を塗りつける。

退魔娘のオナニーじみた所作を、淫魔はかぶりつきで胡座をかいて見ていた。ニコニコと笑みを浮かべて、指の一挙一動と粘液を塗りつけられる刺激で細かく振幅する大陰唇や見え隠れする膣内粘膜を瞬きもせずに見ている。

「お客様、気に入ったのなら見てくださいアル……た、退魔拳師がお客様の……淫魔様の前でオマンコにローションを塗っているところをお楽しみくださいアル」

ラヴァンダに教えられた男が好みそうな台詞を、性欲を煽るような口調で言つと、

淫魔はうんうんと頷いた。

股の間からそそり立ち、メイリンの乾きかけの唾液で濡れ光る逸物は、直角に近い角度で反り返りながら寒さに震えているみたいブルブル震えている。いつでも退魔娘の淫裂に挿入可能な状態になっていた。

「ああ……わたしなんかの身体でそんなに興奮してもらって嬉しいアル……その立派なペニスで、どうか娼婦退魔拳師のぬるぬるオマンコを犯してくださいアル……」

淫魔の情欲を大きくさせ、少しでも多く精気を奪い取る下心を隠しながら従順な娼婦を装う。ピンク色にテカる陰部をゆっくり左右に振り、挿入したくなるよう挑発する。

「うんうん、それじゃ『閃光のメイリン』ちゃん。淫魔のおじさんの挿入を手伝ってくれるかい。このチンポの先をオマンコの入り口に退魔師のキミが当てるんだ」

淫魔は互いの身分を言葉で強調しながら、膝立ちで寄ってくる。

「はいアル……」

逆らえない退魔娘は淫魔の言葉に従い、反り返っていた逸物の幹を掴む。一度、しかも大量に放出したにもかかわらず肉棒は勃起したての時と遜色のない熱さと硬さを孕んでいる。まるで熱した鉄棒を握っているようだった。

陰部を見せつける体勢を崩さぬまま、にじり寄ってくる淫魔と呼吸を合わせてぴっ

第二話 娼婦退魔師の初仕事

たり閉じた淫裂に先端を嵌める。

「んっ……う……」

手で触れていた時よりも鮮明に、淫魔の亀頭の感触が膣内になだれ込んでくるのを感じ、メイリンは思わず吐息を上擦らせた。

愛液よりもぬめりの強いローションで湿っていたからか、淫魔の亀頭の嵌まり具合は奇妙な心地よさを感じさせる。陰部の入り口に妖しい痺れが生まれ、背筋を駆け上っていく。それは寒気に似た感覚なのに、それほど不快ではなかった。

(ラヴァンダに犯される時と違うアル……)

相手の性別の違いが原因だろうか。女に犯されるよりも男に犯されるほうが、本能的にしつくりくるのかも知れない。

それに、退魔娼婦として働かされるに当たり、短期集中だったとは言え、ラヴァンダに散々犯されてセックスを教え込まれていたせいで、身体も淫らになっていることもあり得る。処女の頃であれば、いくらローションの助けがあっても、こんなに大きくて太い亀頭などとても入らなかつただろう。

処女を捧げたいと思っていた異性がいるにもかかわらず、初めてを女妖怪に奪われ、最初に肌を重ねる男も淫魔に決まってしまうた。人間の男との性体験はまだなのに、身体がどんどん淫魔とのセックスに慣れていく。考えるほど自分がどん底だと思い知

らされる。

（だめアル、彼のことより今は目の前のことに集中しないと。考えるほど気が滅入ってくるアル！）

落ち込んでも何もならない。苦汁をなめさせられても逆転するために努力をしなければ自分は一生、ラヴアンダ子飼いの娼婦なんだと自分に言い聞かせて気を取り直すと、

「ふくん、メイリンちゃんは好きな男がいたのか。退魔師とは言え、年頃の娘なんだから当然と言えば当然だけど、色恋沙汰は関心なさそうに見えてたから意外でもあるかな」

膣内に亀頭を埋没させながら背筋を伸ばした状態で、淫魔が感心した風に呟いた。

「その男性の名前は何て言うのかな？ おじさんに教えてくれないかい」

思考がテレパシーとして送信されていたらしい。メイリンは状況に気づいて慌てた。

「あ、いや、彼のことは忘れたアルから……それよりも早くお客様のオチンポをメイリンにくださいアル」

正直に言ってしまったら彼に災いが降りかからないとも限らない。メイリンは誤魔化すために、はにかみながらふしだらなおねだりをする。

「そうだね、淫魔に教えるわけにはいかないよねえ。なら、『彼氏』くんと呼ぶこと

第二話 娼婦退魔師の初仕事

にしようか」

「え、なにアルか……?」

誤魔化しは通じなかったものの、それで気を悪くした風でもないのはありがたかったが、仮名までつけて彼にこだわることに胸騒ぎを覚える。

「彼氏を差し置いて、メイリンちゃんとセックスするのは気が引けるからね。お詫びをしながらキミと励ませてもらうことにするよ」

「お詫び……?」

ニユブブブブ、ズンッ!

「はあああンンンン!」

ローションのぬめりを纏った肉の松ぼっくりが、退魔娘の膣内を広げながら一気に駆け抜け、子宮口にぶち当たる。

重たい衝撃が子宮口から子宮に抜けていくが痛みはなく、じゅんとした甘い振動が余韻を残して膣内に渦巻いている。

「彼氏くん、すまないね。メイリンちゃんのオマンコは、俺のチンポですっかり一杯になったよ」

メイリンの両脇に手を突いて、彼女に向かって言うてくる。

「そうだねメイリンちゃん。キミのオマンコは今、俺のチンポでみっちり埋まってい

るんだよね」

言葉で彼のことを意識させられているのに、彼を裏切るような　喜んで浮気する女みたいな淫らな台詞を言いたいとは思わない。

しかし、今のメイリンには逆らえない理由がある。

退魔師として修行を重ねてきた娘が、血を吐く思いで笑顔を作り、言葉を紡ぐ。

「はいアル……お客様の……淫魔様の逞しいオチンポが、メイリンのオマンコを満たしているアル」

「おじさんのチンポはどんな具合だい？」

「ああ……すごく硬くて、熱くて……それに重くて、まるで杭を打ち込まれているようアル……はあ、はあ……」

淫魔が好みそうな台詞を言っていると、膣内で脈動する牡棒を強く意識してしまう。高熱の固まりである肉棒に負けないくらいに膣の中が熱くなっているのが分かった。

チャイナドレスからのぞく手足の肌も桜色が差してきて、腋の下やうなじなどには細かい汗が浮いている。

淫魔の肉棒を奥まで啜え込んだ退魔娘は、徐々に熱に浮かされた顔になっており、呼気も乱れ始めていた。

「よしよし、よく言えたね。なら、今度はおじさんがメイリンちゃんのオマンコの感

第二話 娼婦退魔師の初仕事

想を言っただけよ。」

「はあはあと吐息を荒らげる退魔娘をニコニコと見下ろしながら、淫魔は言葉を継ぐ。戦闘タイプの退魔師で、しかも若いだけあってオマンコの締めりは最高だよ。ヒダの絡み具合はまだまだ甘いけど、締めりがカバーしているから男なら何度でも精液を吐き出したくなるだろうね。勿論、退魔師姿がよく似合うメイリンちゃんがグラマーで美人だつてことも重要さ。強くて可愛いくてオマンコが最高の女の子を彼氏に内緒で、お金を払うだけでつまみ食いできちゃうなんてねえ。俺は淫魔で、本当ならメイリンちゃんに殺される側なのに。」

見下ろしながらメイリンの目を見て言う淫魔の顔は、やはりひとのいい笑みを浮かべている。

「……っう」

惨めな境遇を改めて認識させる言葉を聞かされるだけで、心が猛烈に痛む。だが、痛めば痛むほど肉棒に内側から広げられている膣内快感が大きくなっている。

痒くなる薬でも塗り付けられたかのように、肉棒と接する膣肉全部がむず痒さに襲われて、早く肉棒に擦って欲しいという衝動に駆られ、控えめにだが、つつい腰を揺らしてしまふ。

「ふふ、我慢できなくなってきたんだね。それじゃ、焦らすのは可愛そうだからメイ

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

リンちゃんの最高のオマンコをもつと最高にしてあげようか」

柱みたいに両脇に立っていた太い腕が、メイリンの背中を抱きしめる。

敗北の証の『退魔装甲』に包まれた豊胸に、中年男のゆるんだ胸板が密着する。仰向けでも流れない豊胸が、男の胸板にぐいぐい押されてほとんど扁平になる。

顎と鼻先がくつききそうな間近に淫魔の顔が下りてきた。細目のにこにこ顔で娼婦退魔師の表情を凝視している。

「いくよ。メイリンちゃん」

宣言すると、淫魔は腰を振り始める。

亀頭と子宮口を密着させた状態で、最奥を小刻みに突いてくる。

電動歯ブラシじみた連続ピストンだった。子宮口の肉がどんどんほぐれて柔らかくなつていくような感覚に捕らわれる。

「はあああ、んんんっ……………あふああああうう……………!!」

子宮口を狙い撃ちした責めに、退魔娘があられもない声をあげる。快樂よりも苦しみの方が強いので、叫びには悲痛が混じっていた。

「ふむ、これはまだ早いか。なら、これでどうだい？」

あがる叫びと、泣きそうになっているメイリンの顔を探偵の目で見つめた後、連続ピストンは円運動に変わった。子宮口を抉る具合で、ネジが締まる様子を彷彿とさせ

第二話 娼婦退魔師の初仕事

る所作だった。

「あふっ、んふう……はああ、んんっ……はああ……」

「ふむ、これはいいみたいだね。続けるよ」

ローションのぬめり音を響かせながら、淫魔は子宮口をねっとりと責め続ける。メイリンの呻きは湿っていて、吐き出される呼気は熱っぽくて重い。

「お、お客様何をしているアルか……わたしに構わず、好きにしてくださいアル」

「ん？ これでも好きにしてるんだがねえ。ひよっとして、男は自分勝手にマンコでチンポを擦って気持ちよくなるとでも思ってるのかな？」

腕に力を込めて抱擁を強め、ミントの香りの吐息をメイリンにぶつけながら淫魔が続ける。

「一緒に気持ちよくなりたいって言ったじゃないか。それに、メイリンちゃんのオマッコをもっとよくしてあげるって。おじさんはね、メイリンちゃんのポルチオ性感帯を鍛えて上げようとしてるんだよ」

「んふう……鍛える……あふん……？」

「そうだよ。一番奥を責めて女の子があえいでくれたら男は嬉しくなるものでねえ。だから、メイリンちゃんをチンポで征服した男が、もっと満足できるようにキミのオマッコをいやらしく育ててあげてるってわけさ」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「なんで……そんなこと……はああ……」

「だって、彼氏くんだって男なんだよ？　メイリンちゃんの入り口から一番奥までチンポで制圧できて、しかもメイリンちゃんが派手に感じてくれたら嬉しいはずさ。おじさんはそのお手伝いをしたいってわけ。それに、ポルチオで感じる度に、そこまで育てたおじさんのことを思い出してくれるだろうしねえ」

それまでにここにこしていた顔が、最後にネチリといやらしさを帯びた。頬が盛り上がって細い目がたわみ、瞳に宿る光にドス黒さが混じる。暴力的な要素は一つもないのに、冴えない肥満中年から人間には出せない淀んだ淒味が放たれている。

「そろそろいいかな。ちよつと激しくいくよつ、と」

淫魔は上体を起こした。背中を反らしながら、メイリンの太腿を抱え、腰を小刻みに前後動させる。

「んあああ、はああ、んっ、んんっ、はあ、はあっ……！」

円運動で慣らされたせいか、苦しみを感じたはずの動きが、今は快感の方が大きかった。亀頭の先が子宮口を何度も素早く叩き、振動が子宮まで届く。ローシヨンのぬめりに加え、増え始めた愛液もクツシヨンとなり、身体に染み込んでくる快楽を味わせる。

「膣が締まってきたよ。気持ちいいんだね？　こんなに早く順応するなんて、メイリ

第二話 娼婦退魔師の初仕事

ンちゃんは退魔師よりも娼婦の方が向いているよ」

ポルチオ快感のせいで真っ赤になった退魔娘の顔を見下ろしながら、断定口調で言ってくる。

（まずいアル…… どんどん気持ちよくなって…… 本当に、淫魔に一番奥を開発されて…… そこが気持ちよくなる度に、この淫魔のことを思い出してしまうかも知れないアル）

想い人にこの喜びを味わわせてもらった時にも、中年淫魔のことを思い出してしまったらと思うと背筋が寒くなる。

だが、そんな悪感情も最奥を突かれる快感が呑み込んでしまい長くは続かない。

「そんな、ああ、んんっ、娼婦なんて…… わたしは退魔師アル…… んくううう」

「彼氏くんによろしくねメイリンちゃん。彼氏のチンポがおじさんのよりもスゴいとは思えないけど、彼氏とのエッチは違うだろうからねえ。心の喜びっていつのかな。大したことのないチンポでも、愛があれば子宮がどんどん下がってきて、奥も好きなだけ突いてもらえるんだらうねえ」

だんだん抜き差しのストロークが長くなっていく。子宮口を重点的に責めていた亀頭が抜けそうになるまで引き抜かれると、若い膣内をゆっくりと擦りながらまた最奥を小突きにくる。傘みたいにかりが高く広がっているので、まだ溝の浅い肉襞も擦り

上げられる。

ペニスが引き抜かれる際には、多量のローションと愛液が掻き出される。ふたりの結合部は白く泡立ち、直下のシートには握り拳大の染みが生まれていた。

「たっぷり突いてもらおうといいよ。何回もポルチオでイッて、その度におじさんを思い出してね。子宮口でイけるのは、淫魔のおじさんが調教してくれたからだって、彼氏くんに教えてあげたら嬉しいなあ」

恋人との喜びに割り込む余地を刻みつけている淫魔の逸物はどんどん膨らんでいく。燃えてるように熱くなり、その硬さとずっしりした重量感は、退魔娘の初々しい締め付けに屈服しないで内側から押し返している。

「はああ、あああ、ああっ、だめアル、許してっ……！」

淫魔にピストンされる快感は増す一方で、子宮口の開発も順調だった。一突きされるだけで目の前に火花が飛び散り、子宮全部が揺さぶられる。

それは淫らな欲望を煽り、最奥の壁を突き込まれる欲求を湧かせる。突かれるほど、もつと突いて欲しくて、きゅんと疼いてしまうのだ。

退魔娘は坂道を転げ落ちるように、一生拭えない傷跡を深くされていつている。

「ふふふ、そろそろいきそうだね。真っ赤ないやらしい顔が素敵だよ。さあ、一番奥を性感帯に鍛えてあげたおじさんに、そこでいく時の顔を見せてご覧。精液もたっぷり

第二話 娼婦退魔師の初仕事

り出してあげるからね」

余裕なくあえぐ退魔娘をニコニコと見下ろしながら、腰振りを大きくする。風に揺れる稲穂のように全身を揺らし、膂力を総動員して子宮口を突く。

肉の松ぼっくりはぷっくりと膨れ上がっており、ラヴァンダに何度も膣内射精されたメイリンには、それが射精の前兆であることが分かった。

「いやッ、今出されたら、んあああ、イッてしまうアル、はあ、はああ、子宮口でイッてしまうアルっ」

とどめを刺されてしまうという意識が伸しかかってくる。いやいやと首を振るが抵抗はそれだけだった。快感のせいで身体に力が入らず、抵抗らしい抵抗ができない。

「イッていいんだよ。おじさんとイこうね。『閃光のメイリン』ちゃんと一緒にイけるなんて、すごく嬉しいよ」

結合部同士をぶつける甲高い音と、愛液とローションの粘っこい水音が響く。

「彼氏くん悪いね。メイリンちゃんに中出しさせてもらっよ。おじさんが開発させてもらった子宮口でイッてもらいながら、そこにびったりくっつけて淫魔の精液を退魔師の彼女にたっぷりと浴びせて、よおく穢してあげるからねえ」

「イヤあるよっ、こんな風にいくのなんてイヤある、あああ、いやあああ!」
相手を絶頂させた方が都合がいいことも、自分が娼婦を演じなければならぬとい

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる



第二話 娼婦退魔師の初仕事

う鉄則も忘れ、唯一自由になる口で嬌声混じりの悲鳴を上げ、痛苦とも法悦ともつかない涙を浮かべる。

そんな退魔娘の子宮口に、破裂しそうだった亀頭がめりこんだ。

「ああああああ、いやああああああアアアア！」

最奥の肉にすっかり包まれた状態でビクビク脈動し、それに連動して膣内も痙攣を起こす。膣の痙攣で身を揺さぶられながら、亀頭が精液を噴出させた。

ビュルルルルル！ ドビュツンン！ ブビユウ~~~~！

「おおおつ、搾り取られる！」

「いやあああつつ、んんんツ、はああ、出てるアル、ア~~~~！」

背中を仰げ反らせるメイリンの膣内で、淫魔の精液が跳梁する。口で処理した時に負けない粘度と熱感を伴う汚液は子宮口をカアツと熱くさせ、退魔娘の肉襞の谷間にどんどん染み込んでいく。

淫魔は腰を浮かせて逆流を防ぎながら、自分が開発した子宮口を穢らわしい濁液で溺れさせる。

「ほらほら、おじさんの汚い精液でメイリンちゃんの子宮口を冠水させてあげよ。オマンコをおじさんの精液の臭いでとびきり臭くしてあげよう」

「ああああ、いやアル、もう出すなアルツ！ うつうつ……わたし、イッてしまった

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

アル……こんな……淫魔に射精されて……覚えてしまうアル……この淫魔のこと……」

しつこく震えるペニスに精液を吐き出される感触、猛烈な熱さと粘着感が頭の中に強く刻まれていく。

「ふふふ、まだまだこれからだよ。子宮口でもっともっと気持ちよくなるよう、調教してあげるからねえ」

精液塗れの膣内で、力を失わない剛棒が前後動し始める。ドロドロの白濁が掻き出され、退魔娘の股間を汚す。

「も、もう嫌アル……これ以上淫魔にイカされるのは……調教されるのは……」

「だめだよわがまま言っちゃ。メイリンちゃんはお金で買われた娼婦なんだから。買ったおじさんの言うことを聞かないとね。なに、痛いことは絶対にしないさ。一緒に気持ちよくなって、彼氏くんと気持ちいいセックスができるように、淫らな身体にさせるだけだから」

ニコニコ顔の瞳が、ドス黒さを増していた。淫魔が本気だということ信じさせられる。

本来の力が発揮できれば歯牙にもかけないはずの淫魔の調教を、退魔娘は避ける術がなかった。

第二話 娼婦退魔師の初仕事

「ちゅば……んふう……チロチロ、んふ、はあ、美味しいわあ。女の子を調教するのが大好きなスケベ淫魔の精気だけあって、口の中がとろけそう……たっぷり搾り取ってくれてありがとう、メイリンちゃん」

枷の呪いで定刻に戻ってきたメイリンに背後から抱きつき、両腕の枷を握りしめ、首輪を舐めるラヴァンダ。メイリンの退魔力を吸い取った時も同じ風にしていたが、それだけで精気を回収できるらしい。思い出すのもおぞましい淫魔との情事で吸収した精気が自分の身体から抜けているのをメイリンは感じていた。

「これからも頑張って、相手から精気を搾り取ってね。もしもセックスしたいタイプの子とか、シチュエーションとかリクエストがあれば言ってちょうだい。できるだけお望み通りにしてあげるから」

人形みたいに俯きながら押し黙っていたメイリンが、それを聞いて口を開く。

「なら、輪姦されたいアル……ひとりじゃ、物足りないアルから」

「まあっ、処女でなくなっただけで一週間も経っていないのに、メイリンちゃんは輪姦されたいの！ 退魔師なのに、もうそこまで求めちゃうなんて私嬉しいわ。調教した甲斐があつたというものよ」

「わたしは……わたしはもう戻れないって分かったアル……人間と交わっても、淫魔

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

につけられた傷がわたしを痛めつけるアル……逃げられないのなら、楽しんだ方がラクアルから……」

「分かったわ。それじゃ、そのリクエストにお応えしちゃうわね。楽しみにしているのよメイリンちゃん」

嬉嬉とする女妖怪だったが、メイリンはいつまでも俯いていた。

第二話 輪姦奉仕の浜辺

「うは、掲示板にアップされてた写真よりも可愛いじゃん」

「おつ、ほんとに来た来た」

「間違いなく本物だな。『閃光のメイリン』も『コールガール』に落ちぶれるとはなあ」
今回のメイリンの仕事場は、真夏の海水浴場の片隅だった。

大きな岩に囲まれてちよつとした密室になっている場所には三人の男が待っていた。

（淫魔がふたりで人間がひとりアルね）

三人はそれぞれビキニタイプの海水パンツをはいており、身体は逞しかった。

真つ黒に日焼けして一番横柄な男が最も筋骨隆々で、気配からすると淫魔のようだ。太腿から下だけが日焼けしている男は二番目に逞しく、ラグビーでもやっていそうな身体つきだった。彼は人間の気配を漂わせている。最後の一人であり淫魔の力を感じる男は、細身でがっしりしているタイプで、きつね色に日焼けしていた。

（淫魔はともかく、人間もわたしをお金で買うアルか……）

人間を守るために戦う身には気持ちのいい話ではなかった。だが、彼も『大事な』

お客様の一人であり、自分を抱いてくださる牡なのだ。私情を挟んで仕事に手を抜くわけにはいかない。

「ラヴアンダ様に負けて娼婦をさせてもらっているメイリンです。本日は精一杯ご奉仕させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします」

ピンと背筋を伸ばしながらかがみ込み、熱砂の上で三つ指をつき、丁寧に頭を下げる。サラサラの前髪がふわりと垂れた。『退魔装甲』のチャイナドレスを内側から押し上げる豊胸が重力に引かれて前のめりに垂れる。

前回の淫魔のように求められたら別だが、商売の時には普段のアル口調はやめるようラヴアンダに言われていたので使わない。

「へへ、淫魔が相手なのにそんなに慇懃にしてくれるとは、よっぽど躰が行き届いてるんだな。いいぜ、今日はたっぷり可愛がってやるよ」

最もマッチョな男が嗜虐的な笑みを浮かべて近づいてくる。他のふたりも大同小異の顔をしながら、落ちぶれた美退魔師を囲む。

多少の違いがあっても、鍛えられた身体に囲まれると緊張してしまう。三人とも、メイリンよりも背が高いのでまるで筋肉の壁に閉じこめられた気にさせられる。

太陽が容赦なく照りつける中、陽の熱だけでなく男たちの体温もムンムンと肌につかってくる。汗の臭いと牡臭が勝手に鼻に入ってきて嫌でもオトコを意識してしま

う。

背後には例の横柄な男がついた。他のふたりは腕組みをしてこちらを見ている。

「いくぜ、メイリン。ほりゃっ」

「あぁっ」

後ろについた男がチャイナドレスの胸元を乳房の谷間に押し込んだ。

事前にノーブラで来るよう指示されていたので、それだけで裸の胸が転げ出る。

ブルンツツッ！ ブルブルブルぶるぶる……。

柔らかさよりも弾力の強い肉釣り鐘は、皿に乗せたプリンが揺れるのと同じ風にやかましく弾み回り、やがて静まった。

男たちの目が、きめ細かい肌色乳肉に注がれる。異形の手垢が染みこんだ乳房は無垢な時よりも一回り大きくなっている。形も量感を強調させる丸みが強くなり、男に劣情を催させる色気が増していた。太陽に照らされる肌はきめ細かい。炎天下でチャイナドレスを着てきたので蒸れており、汗の膜が太陽光を反射して七色に輝いていた。

「へっへー、色っばいオツパイしてるじゃねーか」

胸板と背中を密着させると、腋の下から手を通して両胸を鷲掴みにする。真っ黒にひやけた太い指が、初手から容赦なく乳肌食い込む。

「んふんっ、メイリンのおっぱいを揉んでくださりありがとうございます。淫魔様の

手でもっと大きく、いやらしくなるよう、たつぷり揉んでくださいね」

女を屈服させるのが好きな淫魔が好みそうな言葉を選び、思い切り媚を売る。

「なんだ、天敵に胸を揉まれてるのに嬉しそうな顔して。退魔師だった女もずいぶん落ちたもんだな」

「あ〜んっ、だつて、退魔師なんかしているよりも、こうしてお客様に可愛がっていただいた方が気持ちいいんですものお」

跡がつきそうな位に強く揉まれている退魔娘が扇情的に腰をくねらせた。チャイナドレスの裾を後ろに盛り上げる桃尻の弾力を男の股間に押しつけて、ビキニパンツの中に隠れているペニスに快樂を与える。

「本当に淫魔の俺に胸を揉まれて気持ちいいのか？ だつたらどんな風にいいのか言つて見る」

「はい、んふう、淫魔様の指がわたしのおっぱいの中に沈んでくると、胸のお肉の中心からじゅんと痺れてきて……あふうん、オマンコが火照ってくる上に、きゅんきゅん疼いてくるんですう……ああ」

肩越しに淫魔を見る退魔娘の眉目はハの字に垂れていた。目は熱っぽく潤んでいて、とても退魔師の瞳ではない。牡丹色の濃くなつた唇は半開きで、真っ白い歯の並びのよさを覗かせながら重たげな吐息をこぼしている。

「この痴女が。お前はかなりの淫魔を倒してきたらしいが、今日はこの俺様がそいつらの敵討ちをしてやるぜ。何度もイカせて、淫魔の味を心と身体に刻み込んでやる」
「はああん、あつ、ああつ、き、刻み込んでください、メイリンに、淫魔様とのセックスのよさをたくさん教えてください」

ギョツと強く揉まれた拍子に身体を貫いた鋭い乳悦に背伸びしながら、メイリンは美声を淫らに裏返らせる。

男が顎をしゃくつた。他の男たちが頷き、メイリンとの距離を詰める。

「俺はキスさせてもらおうかな」

肉付きは薄いのが、性感でツヤの増した唇を見下ろしながら人間の男が宣言する。

「んっ、はい、メイリンとキスしてください、んんっ、お客様」

揉み込みから捏ね上げにシフトした胸責めに甘ったるいあえぎ声を上げさせられながら、キスをねだる。

はあはあと呼吸を荒らげる唇はもぎたてのサクランボみたいにプルンとしていた。上下の唇の間から覗く歯並びの奥で、唾液で飴色を帯びている真っ赤な下がヒクヒクと振幅する。

男はメイリンの横手に陣取ると、彼女の顎を掴んで上向かせ、唇を重ねてきた。

「んっ、んんっ、ちゅぷっ、ちゅっ、んむっ、はああ、あつ」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

はじめは唇で唇を啄むキスだったが、メイリンはすぐに舌を伸ばして彼の唇を舐め始める。

「あんっ、も、もっど激しいキス、ディープキスしましょうよ、メイリン、エッチなキスが大好きなんです、はぁん」

「初対面の男にそんなことを言うなんて、ほんとにビッチじゃねえか」

詰るものの顔はやにさがっている。男は娼婦退魔師の甘言に乗ってキスを激しくする。

自分も舌を伸ばしてメイリンの綺麗な舌と宙空でつつき合う。犬の呼吸じみた激しい呼吸を行って、お互いの顔に湿り気たっぷりの気塊をぶつけ合う。

温もりを帯びたぬめる舌で自分の舌をつつかれると背筋がゾクゾクした。しつこく捏ねられる胸の乳悦と結合し、膣がますます熱くなる。

「んちゅっ、ちゅぷっ、チュプツツツ、んは、ちゅむ、プチュツツツ」

疼くというのに未だに手つかずの股間の寂しさを紛らわせようと、メイリンは相手の舌を唇で食み、思い切り吸い上げる。吸われる男の舌が気持ちよさそうに震える振動が唇に広がり、胸の奥から陶酔が湧いてきた。

「はむっ、んむっ、チュルツ、プチュツツツ、プチュツツツ！　へあ、お客様も、わたしの舌を吸ってください、えろお」

哀願して差し出すと、彼はリクエストに応えてくれた。メイリンがした風に唇で噛みついて、肺活量の限りにバキュームする。

ふたりは舌を吸いあうだけでなく、互いの口内も舐め回す。口蓋、歯茎、歯、頬の裏。そこかしこに舌で唾液を擦り付け、その感触を舌を通じて記憶する。

初めて出会ったふたりは恋人同士のようにディープキスに耽るが、うっとりするメイリンとは反対に、男は優越感に満ちた顔をしている。

（そんな顔をされたら、もっと気持ちよくなってしまおうアル）

守りたいと思っていた人間が、淫魔と仲良くする上に守護者である自分をお金で買った不貞を思うと悲しさに胸が痛むが、その痛みが快感を強く意識させて愉悦が大きくなる。

敵の淫魔の手で胸を責められるのも心地いい。肝心の陰部が手つかずなのは残念だが、心身が蕩けてしまいそんな快感を楽しんでいた。

「くくくっ、胸弄りとキスだけで股がぐしょぐしょじゃねえか。オレはここをいただくぜ」

最後の一人がかかがみ込む。のれんをかき分ける所作で短い裾をめくり上げてまじまじと熟視する。

力を封じられて白色になったチャイナドレスとは反対の、真っ赤なショーツが露わ

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

になる。

紐のサイドがりボン結びになっていおり、フロントもハイレグショーツ並みに面積が小さい。上部にはフリルの垂れ幕がかかっていた。

ショーツはすっかり濡れそぼち、ふっくらした恥丘の輪郭を浮き上がらせている。左右に伸びる太股にも愛液の筋が幾つも走っており、股間からはむせかえるほどの甘酸っぱい匂いがくゆっていた。

「すぐにも勃起チンポを入れられる状態だな。でも、思い通りにはさせないぜ」

男はクロツチを太腿の方へずらすと、股間に顔を貼り付かせた。

紫色がかかった舌をめいっぱい伸ばして、膣口の中に進入させる。

「くうっ、んんっ……はあああ、あああ……！」

入り込んできた舌は伸しかかってくる膣肉を押し返しながら、鯉のぼりよろしく勢いよくそよぐ。表面のザラつきが肉襞を引っ搔いて、硬めの舌先が奥の方をねっとり擦る。

火照っていた膣内がどんどん熱くなっていき、蓄積していた疼きが快感に変換されていく。

「んむっ、はあ、ああ、んん、し、舌もいいですけど、オチンポを、んむうう、オチンポで掻きまわしてくだ、んふうッ」

胸を揉まれる快感のあえぎとディープキスの水音の合間に、より強い刺激を懇願する。

ラヴァンダや中年淫魔の極太カリ高ペニスの快感を知ってしまっただけに、膣内はとても満足できない。舌で擦られるのも快感ではあるのだが、次第にもどかしさが募っていく。無意識のうちに腰が物欲しそうにくねり、太腿が不満そうにがくがく揺れる。

「なんだよ、ベロだけじゃ満足できないってか？」

すっかり勃起した両乳首をつまみ上げながら、背後の男が言ってくる。

退魔娘の口内を楽しんでいた男が顔を離す。舌同士を結ぶ細い唾液の糸がUの字を描いて切れる。

「はい、はああ、メイリンは、ラヴァンダ様や淫魔様のオチンポでオマンコを調教していただいたので……はあ、舌だけでは……物足りなくて……」

恥ずかしそうに頬を染めて、消え入りそうな被虐声で答えた。舐め責めされる腰は執拗に背後の男の股間を擦る。ペニスの性感を高め、膣に入れたくさせるためだ。

「それで、さつきから俺のチンポに尻を押しつけて誘惑しているってわけか。お前は退魔師で、俺は淫魔なのによお」

本来の立場を意識させる言葉に、メイリンの胸は締め付けられる。だがそれは苦痛

ではなく、倒錯感と結託した快感だった。まだ処女だった退魔娘には起こらなかつた反応だが、女妖怪と中年淫魔にたつぷり犯された結果、こうなってしまった。

「それで尻で俺のペニスを刺激して、情けをもらおうって魂胆なのか？」
凶星をつかれたメイリンの顔が紅潮しきり、細かい汗が無数に浮いた全身に桜色が差す。

チャイナドレスを胸の谷間に挟んだまま、真っ黒に日焼けした無骨な手で握られた乳房には静脈が浮いている。一回り大きくなり、甘い乳肌臭をくゆらせている。指の間から覗く乳首も赤く充血して、陰部の欲求不満ぶりに負けないほど弄られたくてもずうずうしていた。

そんな格好でもじもじするメイリン。まるつきり、セックスしたいのに言い出せないウブな淫乱乙女の仕草だった。

「どうなんだよ、俺のチンポの情けが欲しいのか？ ん？」

これまで以上に上へ下へと荒く乳房を揉みながら詰問する。

男は肩の上に顎を乗せた。淫魔の生臭い息が退魔娘の美顔に吹き付けられる。平素ならば不快臭のそれも、快感しか考えられなくなっている身には頭をぼつとさせるそよ風だった。

「は、はいっ、お客様のオチンポのお情けが欲しいですっ……もう、我慢できません、

第三話 輪姦奉仕の浜辺

どうか、淫魔様のお情けをください！」

退魔師にあるまじき台詞を吐き、目を潤ませる。倒錯的な台詞を口にした快感が胸を貫く。こぼした吐息は酷く重たげだった。

「へっへっへ……そこまで言われちゃ断れないな。いいぜ、そら」

淫魔はビキニパンツをずり下げると、仰向けに寝ころんだ。

ラヴアンダや中年淫魔ほどではないが太く長い逸物が、重力に引かれて斜めに立つ。熟れすぎたバナナみたいに黒ずんでいる全容が、女遊びに長けていることを思わせる。

「跨がれよ。俺のチンポを使わせてやる」

獰猛な目でニヤニヤ笑いながら、腕枕をして待ち構えている。まるっきり退魔娘を目下に見ている態度だった。

「はい、ありがとうございます。お客様の素敵なオチンポで、メイリンはオマンコさせていただきます」

退魔娘は顔を輝かせて淫魔の腰を跨いだ。目の前でショーツのサイドを解き、若い陰部を晒す。

ショーツをなくした股間は、愛液をだらだら垂らし始めた。度重なる本番性行で大陰唇は肥厚しており、処女だった頃の初々しさは面影をなくしている。恥汁に塗れて濡れ光るのがよく似合い、牡の生殖意欲を増進させる淫らな肉土手と化していた。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

垂れる愛液を浴びながらビクついている亀頭を摘む。

「はあ、はあ、あああ、はああチンポお……お、お客様のオチンポいただきますっ」
倒すべき淫魔の怒張を、娼婦退魔師に成り下がった若い娘が、腰を沈めて迎え入れる。
にちゅ……じゅぷぷぷ……じゅぶ……

「んはああああ……熱ういつ……んっふううう……！」
娼婦の作法でチャイナドレスの前布を片手でめくりあげながら、お客様にはしたない娼婦退魔師との合体の様子をお見せするメイリン。

濡れ土手はペニスの円周に沿って冠状に変形している。腰は沈む一方で、淫魔の肉棒はゆっくりと肉壺に収められていく。

高いカリ首が膣内をめぐりあげ、限界まで引っ張りながら奥へと突き進む。それを主導するのは受け入れる側の退魔娘本人で、メイリンは自分好みの速度で啜え込んでいる。

膣内にペニスの熱さが広がって、クンニで焦れていた膣内をカァツと熱くさせる。カリに擦られ、肉棒とふれ合うと肉襞の疼きは膣内を収縮させる快感に変わっていく。
ジユプンツ！

「はあ、はああああ……入りまし、たあ……ああ、淫魔様のおっきなオチンポ、根本まで啜えさせていただきましたっ……はああ」

第三話 輪姦奉仕の浜辺

太腿の付け根の上で尻たぶをひしゃげさせながら、ほうつと満足げな息を吐く。ふたりの結合部は挿入時に漏れ出した愛液でべちゃべちゃになっていた。

「くくっ、淫魔のチンポを咥えたっていうのに、気持ちよさそうな顔をして……おら
おら」

挿入を終えて一息ついていたメイリンに、容赦なく腰を突き上げる。人間よりも強い膂力を持っているタイプらしく、退魔娘はトランポリンで遊ぶ子供のように簡単に身体を浮かせられる。

セミショートの髪がでたらめに踊り、チャイナドレスの裾がひらひら舞う。股間同士が密着している様子が丸見えになり、むっちりとした尻たぶが、太腿を大地にしてゴム鞠みたいに弾む。

「ハアアツ！ んんツ！ は、激しいっ、激しいですお客様あっ！」

「激しいのがいいんだろ？ メイリンのマンコはますます食い締めてくるぞ。愛液もどんどん湧いてくる。退魔師のくせにスケベなマンコしてるぜ」

「やあ、い、言わないで、言わないでくださいっ、退魔師であることは、んあああ、はあアアア！」

淫魔はメイリンが退魔師であることを執拗に意識させながら、女性上位の体位で主導権を握る。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

娼婦退魔師は、健気にチャイナドレスの前布を掴み上げてドス黒い肉棒が卑猥な陰部を出入りする様をお見せして、淫魔の征服欲を快感に昇華させる。

退魔師時代はキリリとしていた眉目が八の字にたわんでいた。牡丹色に染まった唇を半開きにさせてあえぐ様子は被虐的で、淫魔の顔にはもつと辱めてやるという嗜虐心が浮かんでいた。

「そろそろ、子宮口を突かれるのはいいか？ いいよなあ。突く度にマンコが締まるんだからなあ！」

「ああ、いい、イイですっ、ポルチオ気持ちいい、一番奥大好きっ！ もっと、もっと突いてください！」

子宮口ごと子宮が押し上げられる快感にメイリンが嬌声を上げる。以前ならば痛かったというのに、調教された今では頭の中が痺れる位の快感を楽しめる。そして、調教者の思惑通り、ポルチオ快感を感じているとあの中年淫魔の顔が浮かび、調教された時の記憶が脳裏を掠めた。

「よおし、そろそろ一発目を出すぞ……『閃光のメイリン』のマンコに中出ししてやる……うおおおおっつっ！」

ガ二股の太腿をガツシリ掴み、背中ブリッジしながら腰を上下動させる。射精寸前特有の熱感と重量感を膣内に刻みつけながら、他の淫魔に開発された子宮口を突き

上げる。

ビクビク振幅しながら最奥にぶつかる亀頭は破裂寸前の緊張を纏っており、退魔娘の膣内は吐精をせかすように痙攣した。

「淫魔の種汁で女退魔師の子宮口を濡れさせて、子宮を汚い精液で満たしてやるぜ！」

強烈な突き上げに煽られて、肉釣り鐘は激しくバウンドし、ブルンブルンと量感を撒き散らす。尖った乳頭で空を切り、虚空に鶉色の縦線を描く様は、退魔娘の転落ぶりを楽しむ牡たちの愉悦を際立たせる。

「あツク、んはあ、だ、出してくださいっ、メイリンのオマンコを淫魔様のザーメンで濡れさせてッ！」

淫魔の腰振りにぎこちなく迎え腰を打ちながら、娼婦退魔娘は叫ぶ。鈴を転がしたような美声が、男の性汁を待ちこがれる淫猥な響きを孕み、太陽の照りつける青空の下に響き渡る。

ドビユウウウ！ ドビュルルルッ！ ビュビュッ、ドクンドクン！

「ああああ、はあああ、んアアアアア~~~~~！」

ふたりの腰振りのタイミングがぴったり合い、鈴口が子宮口に包み込まれた瞬間、レスラーみたいに筋骨隆々な淫魔が汚らしい精液を吐き出した。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

人外に調教されてきた退魔娘の膣内が、駆除すべき存在の種汁で満たされる。

密着している子宮口はもとより、スキンみたいにペニスにぎゅうぎゅう絡みついて
いる膣壁の隅々までもが汚液に浸食されていった。

「はあああ、奥に……オマンコに、んはああ、きてるッ……お客様の、淫魔様のドロ
ドロザーメン……！」

ふたりは互いに動きを止めていた。淫魔は膂力を総動員したブリッジを維持してい
る。ポルチオを突かれ、濃厚な精液を膣内射精された快感を噛みしめている転落退魔
師を下腹の上に乗せている。

不意に吹いてきた海の匂い満載の風がメイリンのセミショートの後れ毛を揺らし、
男性上位の騎乗位の衝撃が限界にきていたのか、その拍子にヘアクリップがずり落ち
て砂上に落下した。

纏められていた髪が無造作に落ちる。現れたロングヘアは背中に達した。緩くウエ
ーブがかかっており、ふわりと広がりながら垂れている。滝を連想させる清廉さと上
品さを宿しており、世のため人のために戦う退魔拳師だった頃ならばその気高さを際
立たせた美髪だったろうが、娼婦退魔師に成り下がった今は、客を喜ばせるセックス
アピールに過ぎなかった。

「へへ、一気に色っぽくなったなあ」

外見も娘からオンナに変わったメイリンを見上げながら、淫魔は喜悦を浮かべる。自分がセックスで変えてやった、という暗い満足感が窺える得意げな表情だった。

淫魔は腰の上で荒い息をついているメイリンをじっくり見つめる。

長い髪もさることながら、『退魔装甲』の胸元を胸の谷間に押し込みながら呼吸に合わせて上下動している豊満な肉釣り鐘も情欲を煽る。鶉色の乳首は勃起しきり、ツンと上を向いている。汗で乳肌が輝く様は酷く淫猥だった。

彼女は今も律儀に裾を上げているので、性器の結合部は丸見えだ。ドス黒い巨根が、可憐な容姿に似合わず淫らに肥厚し、それでいて黒ずみがまったくない肉土手に突き刺さっている。周囲は愛液で飴色に光り、ちよつとずつ染み出している白濁も幅を利かせている。

「はあ、はあ……そんなにじっくり見られたら恥ずかしいです……でも、淫魔様がお望みでしたら見てください……」

そんな状況に、当人はまったく嫌がっていない。熱視線で恥ずかしい場所を舐められていることに羞恥心は覚えるが、彼や他の客の目を意識すると視線をぶつけられると見られているだけで満足できずに疼いてくる。滅茶苦茶に可愛がって欲しいという衝動が湧いてとまらない。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「確かアナルも嵌められるって話だったな？ そっちをやらせてもらうぞ」
言ってきたのは人間の男だった。股間を盛大に盛り上がらせて、淫魔顔負けの血走った目をしている。

「はい、メイリンはアナルセックスもオーケーです。お客様の素敵なオチンポで、このお尻の穴も犯してください」

ブリッジを崩さない淫魔に向かって上体を傾けていくメイリン。尖った乳首を重力に引っ張らせ、裸の釣り鐘乳房を紡錘形にしながら、硬く盛り上がった筋肉の丘にべったりつける。お尻の裾をペラリとめくり、頬を赤く染めながら尻たぶを両手で広げた。

数えきれるほどの縦皺に囲まれたセピア色の窄まりは、左右に引っ張られても中指の先程の広さもない。そんな肉穴をむっちりと張りつめた尻たぶが困っており、折り畳まれた足が支えている。ふくらはぎと密着する太腿は上半身の体重を受けてムチムチと膨れ上がっていた。

「よおし、んじゃいくぜ。メイリンちゃんのオマンコと尻穴を同時に犯してやる」
騎乗位で犯していた淫魔がニヤリと笑い、ようやくブリッジを解いた。そこへ、ビキニパンツを脱いだ人間の男が覆い被さってくる。

尻穴の入り口に亀頭の先を嵌め込むと、剥き出しの乳房を鷲掴みにして腰を進めた。

「んんっつ……ああああアアアツツッ！」

指の先ほどの肉穴が、淫魔と結託する若い男の亀頭の熱さをなすりつけられながら拡張していく。亀頭が放出する湯気みたいな熱感と、ずっしりくる重量感が狭い孔の中に満ちていった。

「狭くて気持ちいいぜ……そこいらのオンナの処女マンコよりもキクな」

騎乗位情交中に伝っていった愛液と精液が内部に溜まっていたので、挿入はスムーズに進む。狭い場所を力付くでこじ開ける感覚と、そのご褒美であるキツイ締め付けられ感が退魔娘を征服した実感を大きくしているのか、背後の男は満足感と優越感を滲ませた目をしていた。

そんな目で見下ろされるメイリンの胸の鼓動が妖しく高鳴る。青空が広がるビーチでこっそり淫らなことをしているだけでなく、尻の穴まで犯されるといふ異常性が、マゾ的な心を沸き立たせた。

「ん……ふう……根本まで入ったぜ……どんな気分だ、退魔師さんよ」

膣内にはまだ淫魔のペニスが居座っている。その状態でお尻の穴までみっちり埋められたのだ。

胸の鼓動がますます早くなり、まるで長距離走をやり終えた直後のよう。息の詰まりもある。しかし、それらは苦しいものではない。もっと感じていたいという中毒性

を伴っており、全身を包み込む濃密な官能だった。

（オマンコとお尻が満たされて……ああ、これ、凄いアル……はああ……）

まるで身体の内側をペニスのみで充填されたような、内側からぐいぐいくる圧迫感
は、今にも絶頂してしまいそうな位に気持ちがいい。

これで抜き差しを行われたらどうなってしまうのだろうか。

「へへ、期待した顔しやがって。おい、どうして欲しい？ マンコと尻をチンポで埋められた退魔師さんよお」

メイリンの陰部を奥まで占拠している淫魔が口角を吊り上げる。退魔拳師を見上げる目は、モノにしたオナナを嗜虐的に見る獰猛な男のそれだった。

「黙ってちゃ分からないぜ。言葉で伝えてくれないとなあ」

胸に指を食い込ませて緩やかに揉みしだきながら人間の男。自分の頬をメイリンの頬とぴったり合わせ、臭い息を吐きかけながら被虐的な言葉を待ちかまえている。

オナナを思いやる心など少しも持ち合わせていない最低の男たちに迫られているのだが、メイリンが感じるのはいよいよ嫌悪感ではなかった。

「ああ……おふたりでわたしのオマンコとお尻を犯してください……前と後ろでゴリゴリ擦らりたい……あああ、まだ同時にされるのは経験したことがないんです……どうかお客様がたで、メイリンのふた穴責めの初めてをもらってください……んあ

「ああっつっ！」

言い終えるや否や、前後で抜き差しが始まった。下の男は自身の腰を跨ぐ鍛えられていながら艶めかしい太腿をガツシリ掴み、上の男は人外の手垢が染み込んだ、美しくも淫らな肉釣り鐘を揉む。オンナ退魔師のセックスアピール部分を掌握してバランスを取りながら、牡たちは励んでいた。

「はあああ、いいっ、イイですっ、前と後ろでゴリゴリして堪らないっつっ！」
胸と背中を筋肉で盛り上がった胸板にサンドイッチされながら、下の男からほぼ垂直に子宮口を突き上げられ、上の男からはやや斜め下方向へ向けて尻の肉洞をほじられる。

外見通りに体力旺盛らしく、ふたりの突き込みはパワフルだった。下の男とメイリンの太腿が互いに派手な衝突音を響かせながらぶつかり合い、上の男の下腹が負けないくらいに大きな音を上げながら尻たぶをスパンキングする。太腿も尻たぶも荒れ模様の海みたいに激しく波打っていた。

「はあ、はあッ、ああああ、こんなの初めて、ああ、いいっ、もっと、もっとわたしを犯して、前と後ろからゴリゴリ擦ってえ！」

メイリンは下の男に抱きつきながら、その顔の真横で官能の熱をたっぷり含んだ吐息をせわしなく吐き出している。甘い口臭を帯びた呼気は男の鼻にぶつかって、その

熱気が彼の鼻の頭をテカらせる。

長い髪が男の頬や額、うなじ、こめかみをくすぐる。夏の日差しと性行による体温の上昇でたっぷり汗をかいているというのに、髪や頭皮からくゆる匂いはラベンダーの仄かな甘みを含んでいた。獣みたいに荒々しい男も、砂糖菓子をパクつく子供の気色を見え隠れさせている。

「おらおら、これがいいのか、これが」

「ああアン、子宮口突かれるのいいっ、堪んないッ！」

子宮が持ち上がるほど最奥を突かれると、そこまで調教した中年淫魔の顔が思い浮かぶ。目の前の淫魔に責められながら、他の淫魔のことを思わずにはいられないことに背徳感を感じ、子宮口を突かれる悦楽が大きくなる。

「気持ちいいのは子宮口だけか？ 尻は感じてないのか？」

「あん、アンツ、お、お尻もいいですっ、はあああ、お尻もイイッ！」

下になっている淫魔へ一層強く抱きつきながら、胸を揉まれる退魔師はアナルセックスで快感を得ていることを宣言する。

キノコの傘を連想させる高いカリが尻肉洞を往復する度に、意識せずにはいられない摩擦快感が内部を満たす。擦られて発火しそうなくらいに熱くなり、もっと擦って欲しいという欲望が湧いてくる。

第三話 輪姦奉仕の浜辺

そんな前後の穴の快感は互いに相乗効果を起こし、娼婦退魔師の身体を燃え上がらせ、快感への欲求を増大させた。

退魔師として真面目に一生を過ごしていたのでは決して味わえない快樂だったろう。伴侶を得て愛の営みを行っていても、輪姦される喜びは味わえなかったはずだ。そもそも、選んだ相手がオナナの喜びを伝えてくれたという保証もない。

娼婦であるからこそ得られる喜びであり、オナナ退魔師を抱きたがる淫魔や下劣な人間と交じわえる場が提供されているからこそ享受できるひとときなのだ。

そう思うと、むらむらして堪らなかった。

子宮口を突き、尻穴を奥まで擦り上げるペニスが揃って射精前のビクつきを見せ始めた時、メイリンも淫魔たちに協力する。

サンドイツチされた体勢で、豊満で細い括れを動かして、ふた穴を責めてくる牡たちに呼吸を合わせる。

「おお、自分から腰を振り出したぞ。淫魔を何人も倒した『閃光のメイリン』も、とんだスキモノに落ちたもんだぜ」

髭るの字を実演している三人をじっくり鑑賞していた一人が、他のふたりと揃って官能的な呼吸をし始めたメイリンと距離を詰める。ビキニパンツを下ろし、他のふたりに劣らぬ勃起ペニスを露出させると膝立ちになった。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

退魔娘は当たり前のように舌を伸ばして亀頭を舐める。自身の唾液でべとべとにし終えると、あ〜んと口を大きく開けて呑み込んだ。

「あむっ、ちゅぱっ、チュプツツッ！　へあ、アン、あんツ、ちゅぽっ、チュルルルツツ！　んくんく」

退魔拳師は媚をたっぷり含んだ上目遣いで最後の男を見つめながら口淫奉仕に励む。下から突き上げられ、上から突き込まれる快感で合間合間に口を休めて喜びを込めたあえぎ声を漏らしても、すぐに熱くて硬いペニスに食いついて口舌奉仕を再開する。

「前と後ろをやられてる上に、他の男のチンポもしゃぶるのかよ」

「そんなオンナには、三人同時に射精してやるうぜ」

「いいぜ、おおっ、待つてるよ口と胃の中をザーメンでいっぱいにしてやるからな」
三人はアイコンタクトした。

肉穴を擦るふたりは阿吽の呼吸で抜き差しを連動させている。前と後ろで同時に奥までカ리를滑らせ、同時にカリ首までペニスを引き抜く。口奉仕をさせていた淫魔もメイリンの頭を掴んで腰を振り始めた。

「んむっ、んんっ、チュプツ、ジュルルルル、んふう、フーッ、フーッ、むぐううう、チュプツ~~~~~ッ！　んフツ」

サラサラの髪を振り乱し、汗の浮かんだ紅潮顔で、メイリンは男たちの責めを受け止める。嫌な顔など少しもせず、頬をツヤツヤさせながら全身で輪姦を楽しんでいる。

ビュブンツツツ！ ドビュルルル！ ドブドブブツツ！

子宮口に嵌まり込んだ亀頭が、根本まで尻孔に差し込まれたペニスに、口を犯していた逸物が一斉に牡汁を吐き出した。

淫魔の精液も、人間のザーメンもマグマのように熱く粘っこい。膣内を再び汁で満たし、排泄肉道をドロドロに染め、口内を牡汁臭さで一杯にする。

「んむっ、むぐっ、んぐんぐ、んんツツツうううウウウ！ チュウツ、チュプツ、ブチュウツツ！」

ドクドクと性汁を吐き出す肉棒の律動を三孔で感じながら、娼婦退魔師は口に注入される牡汁を吸い飲んでいる。頬をへこませて熱烈にしゃぶりつきながら、眉目を垂らした恍惚顔を淫魔に向けつつ、湿り気たっぷりの甲高い吸引音を響かせる。前後動する喉に躊躇いの色はなく、渴いた喉を嬉しそうに潤している風だった。

実際、ネバナバの汁を唾液を絡めて飲み下すと食道も胃もカアツと熱くなり、それが何とも心地よい。好きでもないどころか、敵でありその敵と結託する邪な男の種汁を膣と尻に同時に注がれている快感は、心身が溶けてしまいそうな位に蠱惑的だった。男たちは一ミリでも深いところで射精したが、執拗に腰を押しつけてくる。メイ

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

リンは逆らわず、彼らの狼藉に身を委ね、少しでも深いところでペニスを受け止め続ける。

「ぷはあ……はああ……へああ……あ、ありがとうございます……お客様の精液、スゴク濃くて美味しかったです、きゅっ」

口を犯していた男がペニスを離れたので、娼婦らしく本音混じりの謝辞を述べると、彼は目の前で逸物を自慰してメイリンに顔射した。

髪の毛の貼り付いた額に直撃し、粘液の滴は枝分かれしてゆっくりと落ちていく。栗の花臭を濃くした汁の臭いが退魔拳師の美顔を覆う。普通の女ならば顔をしかめるはずの不快臭だったが、今のメイリンには芳香だった。

断りなく顔射されたことも、娼婦の自分がそうさせるだけの魅力を放っていたのだと考えると嬉しくなってくる。

「ぺろ……んく……はああ、美味しいです……」

所々に精液の残滓が残る舌で口の周りについた精液を舐めるメイリン。

「もつとしゃぶらせてやるよ。オラ、口を開ける」

「こつちもまだまだ収まらねーぞ。今日は玉袋の中の種汁全部、このいやらしい尻に注いでやるからな」

「淫魔の子供を孕むくらいマンコに出してやるぞ。これまで淫魔を倒してきた」閃光

のメイリン』の腹を、淫魔の種でボテ腹にする……考えただけでゾクゾクするなア。もつと犯して欲しいんだろ？ だったら、妊娠するって言え。でなきや、もうマンコを気持ちよくしてやらねえぞ」

豊胸をぎゅうぎゅう押しつけて抱きついているメイリンとごく間近で対面しながら言い放つ。

退魔拳師は潤んだ目で淫魔の目を見つめ、甘い口臭を人間の敵にぶつけながら言葉を紡ぐ。

「はい……退魔拳師のメイリンを孕ませてください……はああ、退魔師だけど淫魔様のお子さまを妊娠しても構いません……だって……ああ、だって」

退魔師の仲間が聞いたなら裏切り者扱いされること確実の台詞を恥ずかしそうに言う。
「だって、なんだ？」

まだ膣内で力を失わない亀頭でゆるやかに子宮口を叩きながら淫魔は続きを促す。
精液と愛液の混合汁でぐちゃぐちゃになっている膣内から、粘い水音が聞こえてくる。
牡と牝のはしたない汁の臭いが混じり合いながら周囲を包み込む。

「オマンコし足りないから……もつと輪姦されたいからです……んうん」

獰猛に口角を吊り上げ、嘲笑の含み笑いをしながら三人の牡獣たちが退魔娼婦髒りを再開する。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

メイリンは被虐的な歓声を上げ、下劣な牡たちに淫らに献身し続けるのだった。

「あらあら、お盛んだったわねえ」

日が沈むまで輪姦されていたメイリンを、ラヴァンダが楽しそうに見下ろしている。身体を売って男たちの精気を奪ったことで鮮烈な青色を取り戻した『退魔装甲』は隅々まで精液で汚れ、ガビガビになっていた。常人ならば顔をしかめずにはいられない牡汁臭が辺りに充満し、メイリン自身が発生源になっている。

仰向けになってぐったりしている彼女の股間や口元からは半透明になった精液や愛液が流れていた。手足のそこかしこにも白濁の痕跡のテカリが見える。

目元は髪に隠れており、口元は静かに引き結ばれている。

「どう？ 初めての輪姦は楽しかった？ 私の元に来てくれるのなら、三人といわず五人でも十人でも手配してあげるわよ」

紫色のビキニを纏い、豊満な肉体の魅力を大判振る舞いしている女妖怪が、メイリンの顔の横でかがみ込む。

退魔娘はよろよると手を上げて、ラヴァンダの腹部に手の平を当てた。

そのちよつとした弾みで、乾いた砂の城が音もなく崩れるみたいに、退魔力を封じていた手枷と首輪が崩れ落ちた。

「あらまあ」

優位性の崩壊を示す出来事であるのに、女妖怪は慌てるでも焦るでも戦くでもなく、ただ間の抜けた声を出した。退魔拳師は叫ぶ。

「魔滅閃光掌！」

手の平と腹部の接触面で燐光が爆発し、夜の闇が混じり始めた周囲を包み込む。

炭酸ジュースみたいなき音を立てて、ラヴァンダの身体がドロリと溶け、少しずつ霧散していく。死にかけみたいだった退魔娘が哄笑する。

「あは……アハハハハハハ！」

笑いながらよろよろと立ち上がる。消えていく女妖怪を見下ろして、

「ざまあ見るアル！ わたしを舐めてるからそんな風になるアルよ！」

敗北前よりもはずっぱで威勢のいい侮蔑の絶叫だった。目が異様にランランと光っている。臥薪嘗胆した者特有の凄絶な光だった。

「諦めて娼婦になったふりをして、下種なやつらとの肉体関係も忍従していたわけね。そうして力を溜めて……」

消える寸前だというのに、ラヴァンダは艶やかに目を細めている。瞳には憎悪や憤怒といった感情は見られない。自分を騙して消滅させようとしている相手に向けるには不相応の、親しげな雰囲気を感じられる。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「え……？」

さぞや悔しがるだろうと思っただけに、その反応は予想外だった。

だが、真意を確かめる前に、ラベンダーの女妖怪は完全に消滅してしまった。身体が振りまいていた仄甘い花の匂いも、すぐに潮風に吹かれて嗅げなくなる。

「ま、まあいいアル。これで任務完了アル……」

身体を穢されるのにも耐えて勝利を掴んだ退魔師はその場を後にする。

その顔は、とても勝利者のそれではなかった。

望まなかったとは言え、淫魔と肉体関係を持ってしまった。汚された身体は、いくら洗い流しても以前のようない無垢さを取り戻すことはきっとできない。

そして最も胸を痛ませるのは、意中の恋人のこと。

こんなに穢れてしまったのでは、昔のように親しくすることはできないだろうが、今回の出来事を正直に打ち明けて関係を清算することはしなければならぬ。それが彼を愛している自分のけじめなのだ。

メイリンの頭上には、星のない漆黒の空が広がり、強く冷たくなり始めた潮風が容赦なく吹き付けていた。

最終話 勝利者の屈服

ラベンダーの女妖怪を倒してから数日後の夜。

「ほ、ほんとにいいアルか……わたし、淫魔たちに穢されたのに……」

ラブホテルの一室で、メイリンは一糸纏わぬ姿になっている。入浴中に入念に髪を洗い、身体を清めたばかりだった。

湿り気を残したロングヘアが室内照明を浴びてしっとりした輝きを放っている。肌は相変わらずきめ細かく、健康的な肌色をしていた。淫魔に開発された身体は色っぽ丸みが強くなっていた、胸や太腿、お尻などは特に熟れた魅力を漂わせ、オンナならではの魅力を醸している。

メイリンは恥ずかしそうに頬を染め、嬉しそうに目を輝かせながら恋人を見つめていた。

「メイリンは相変わらず強いメイリンだよ。そんな目にあつたのに、それでも任務を完遂したところなんか、他の誰にも真似できないし」

ベッドに裸で座る恋人は赤らんでいた顔をますます赤くし、

「ぜんぜん汚れてるって感じのない、綺麗な身体じゃないか。メイリンを抱かせても

らえるなんて、とつても光栄だよ」

「ありがとうアル」

心の底から嬉しかった。

事件のあらましを聞いた彼はメイリンを蔑むことなく、それどころか励まし慰めてくれる。その気持ちは嘘でない証に、初めて抱かせてくれないかとさえ言ってくれた。こんな、淫魔の手にかかった自分などにだ。

汚れてしまった自分には受け入れる資格はないと思い、断ろうとしたのだが、彼は引き下がらなかった。結局その熱意に負け、ここにこうしている。

「よろしくお願いするアル……わたしの身体は優のものアル……好きな風に抱いて欲しいアル」

「ああ……ありがとう」

ベッドに仰向けになったメイリンの横に添い寝する彼。

男の身体から放たれる体温と呼気が肌に触れてくる。同じ退魔師として厳しい修行を重ねているので彼の身体は逞しい。ビーチで輪姦してきた三人組の中でも二番目位だった。

(彼氏に抱かれるのに、他の男の……しかも淫魔のことなんて考えてはだめアル)

無意識に思い浮かべた淫魔たちの姿を振り払い、愛しい彼に向かって意識を傾ける。

「綺麗なおっぱいだな。弾力も強くて揉んでるだけで気持ちいいよ」
片手でメイリンの肩を抱き寄せ、もう片方で乳房を揉みながら優しい声で褒めてくれる。

彼の指は逞しい外見とは裏腹に繊細だった。女性みたいにほっそりした指が、乳房を囲むように浅く食い込んでくる。

「んっ……うん………」

思いやりを込めて揉んでくれているのが分かる所作だった。慈しむようにほどよい強さで揉まれていると、徐々に甘い痺れが起こってくる。意識しなくても鼻にかかった呻きが漏れ始める。

「もつと強くしてもいいアルよ……乳首にも触れて欲しいアル」

優しい愛撫も気持ちいいのだが、それでは物足りなかった。ビーチで輪姦された時の、思いやりが欠片もない荒々しい揉み込みが脳裏を掠めた。

（やだわたし、おねだりなんかして……またあいつらのことを思い出して）

イメージの中でぶんぶん頭を振り、彼氏の愛撫を受けることに集中する。

「分かった。こんな感じでどう？」

親指が鶯色の乳頭に向かい、その腹が天井部分を覆い尽くす。指の根本で円を描きながら乳首を転がす。

転がされる度にピリツとした快感電流が乳房の内側に噛みついてくる。乳頭を起点に乳房の体温が少しずつ上昇し、頭の中がほんの少し霞がかってきて心地よい。

「んんんツ、いい、上手アル、その調子で、んっ、乳首を倒したり、胸の中に押し込んだりして欲しいアル」

淫魔に犯された後に覚えてしまった具体的な性技の指示を送る。

数日ぶりの性感を愛する彼に与えられることに夢中になっていたメイリンは、自分が何を言っているのか気付かない。

コロコロ、キュツ、キュツ、キュ~~~~ツ、コロコロコロ。

彼も、彼女の求めに素直に応じたいのだろう。恋人のはしたないおねだりに訝しむことなく、リクエスト通りに遂行する。

「もう少し強くしていい　ん~~~~ツ、そ、それは強すぎアル。もう少しソフトに、ああ、そうその位アル、上手いアル、それ位で乳首を転がして、んっ」

力加減についても教えてやり、自分の好みの愛撫をさせる。

恋人の指の中で乳頭がしこり始めていた。感度も上昇しており、乳頭の表面にも内部にもヒリつくような快感が起こっている。

乳首に広がる悦びで、肌色の乳房に桜色が差し始める。見えるか見えないかだった青い静脈の色も濃くなっていた。

（あ、優も興奮してるアル……オチンポが大きくなってるアル）

胸愛撫を始めた時も既に半分勃起していたペニスが、もう挿入可能な位にいきりたつており、その夏の日差しみたいなの熱感と、鉄みたいなの高度を太腿にぶつけている。じゅんつ。

ペニスを意識すると股間がカツと熱くなり、肉壁から愛液をじわあつと滲んでくる。ぴつたり閉じていた淫裂が微かに広がっていて、隙間から涎のように愛液が漏れ出している。

視線をずらすと、淫魔に何度も掴まれたムチムチの太腿と彼自身のお腹でサンドイッチされているペニスが見えた。

亀頭に肌色の皮を半分被っている逸物は、自分を抱いた淫魔や女妖怪、人間のどのペニスよりも小振りだった。

その事実が胸を突く。喪失感のような、寂しさのような、そんな感情が胸の真ん中に湧いてきた。

（あれ……？ 何アルこの気持ち……こんなわたしを許してくれた恋人と結ばれているのにこんな気持ちはおかしいアル……）

自分自身に戸惑うメイリンは、こんな気持ちから抜け出さたくて上擦り声でこう言った。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「そろそろいいアル。もう、優のオチンチンが欲しくて堪らないアル……だから、入れて欲しいアル」

彼と性器で繋がれば、きつと幸せな気持ちで満たされる。おかしいな感情なんか湧いてくる暇などなくなる。そう思つての提案だったのだが、彼は一瞬目を丸くした。

そのすぐ後に「分かつたよ」と言つてくれたが。

返事をされるまでの刹那の沈黙は、メイリンを正気付かせるのに十分な刺激だった。（わ、私何言つてるアル……いくら好きな人とエッチしてるからって、初めてなのに……今は初夜みたいなものなのにおねだりなんかして、まるつきり淫乱女みたいなことを言つて……優も引いちゃつたアル）

ラヴアンダと結託していた日焼け淫乱娘たちの姿が思い浮かぶ。苦し紛れの言葉は、淫魔たちとの情交で覚えてしまったせいであつたものだろうが、そうだとすると、無意識に口にしてしまうほど深く脳に教え込まれたのだろうか。

胸の空白に漠然とした不安が加わる。もしかしたら、逆転のために娼婦のふりをしていたというのに本当は骨の髄まで退魔娼婦根性が叩き込まれていたのではないかという不安である。

「それじゃ、いくよ」

彼は股間の下に陣取り、両脇に太腿を抱え込んだ。正上位で挿入するつもりらしい。

女性器から生えたようによつきりと顔を出している陰茎は、陰部からどれ位離れているかを、同じ位置で淫魔たちの肉棒がそり立っている情景の記憶を思い浮かべて計れるだけに、やはり異形たちのモノよりも小さいと認めないわけにはいかなかった。

（オチンポは大きすぎじゃないアル！ いくら小さくても、愛する人とのセックスの方が気持ちいいに決まってるアル！）

愛する人と結ばれることで満足していたはずなのに、いつの間にか、どちらのペニスでより気持ちよくなれるかということを意識し始める。

「う、うんアル……入れてくださいアル」

斜めに隆起していた肉棒を逆手に掴み、自分の膣口に潜らせる。

握る竿が気持ちよさそうにビクンと跳ねた。大陰唇と小陰唇を巻き込みながら膣口の内周と密着している亀頭がボウツと熱さを増す。

呼応するように膣内の熱も上がり、愛液がどんどん分泌されてくる。肉襞は肉棒の到来を期待するように収縮し、淫魔に開発された子宮口がキュンと切なく疼く。

（ああ……この感じ……やっぱり恋人とエッチする方がいいアルよ）

膣内が性行に期待してざわめいているのに安堵するメイリン。

膝立ちのまま進んで挿入を深めようとする彼の動きに合わせて肉棒を引っ張り、奥

へ奥へと誘導する。

膣口を抜けた辺りで亀頭の皮がすっかり下がり、先端の牡肉塊がすっかり剥き出しになった。ぴったり閉じていた膣内を自分の幅で拡張させながら進んでくる亀頭は、熱湯みたいに熱い。ドクンドクンという力強い脈動も伝わってくる。牝を孕ませる牡の器官らしいどっしりとした重量感もある。そんな肉棒の存在感が、愛する人と一体感と幸福感を強める。

「ああ、もつと奥まで、一気にきていいアルよ……！」

感極まって叫ぶ。ペニスが勢いよく跳ねた。膣肉が隙間なく密着しているので、そのバウンド力は膣内をズンツと揺さぶる。

「はあ、はあつ、ああ……メイリン……根本まで入ったよ……！」

挿入する彼は快感のあえぎ声混じりに、挿入終了報告をしてきた。根本まで入った勃起ペニスは体積を増しながらしきりに跳ねている。いつ射精してもおかしくない状態であることは、望まずに経験豊富となったメイリンには明白だった。

「わたしの中で優のオチンチンが暴れてるアル。もう出そうアルね？ いいアルよ。若いんだから何度でもできるはずアルから、まずは一回出してスッキリするといいアル、ね？」

両脇に腕をつき、紅潮顔で苦痛に耐えるみたいな表情をしている彼に優しく微笑み

かける。恋人よりも先に達することで傷心しないよう、両頬を両手で挟むスキンシップも行い、安心させようとする。

果たして。彼は「ああ」と肯定の返事をし、熱に浮かされたような顔で腰を使い始めた。

「あん、アンツ、いいアル、その調子アル。あ、そんなに腰を引いていたら抜けてしまうアル。先っぽを一番奥に固定して小刻みに突くのも気持ちいいから試してみるアルよ」

彼はメイリンの具体的なアドバイスに子供のように従い、快楽を享受する。その顔には、ベッドの上で女に指示される男の屈辱などは微塵もなかった。

（余裕がなさそうだったから、あの女妖怪に教わったことを言ってみたら……案外役だったみたいアル）

精气収集娼婦として利用されていた時、ラヴァンダから色々教え込まれていたが、中には童貞を相手にする際の指導もあった。その時に聞かされた童貞の典型例 膣に入れてすぐに果てそうになる と同じだったので、ひよっとしたら彼は性交渉は初めてだったのかも知れない。

女妖怪に無理矢理叩き込まれた知識を使うのはいい気分でないが、彼が気持ちよく初体験をしてくれるのなら目を瞑ろうと思う。愛する相手ということもあるが、こん

な汚れた女を初めての相手に選んでくれた男性には、少しでも報いたいという気持ちもある。

だが。

「すごい……くうっ、あああ、メイリンの中、すごっ、おああ！」

（ああ……幸せそうな顔をしてくれてるアル……わたしも……こんな顔したいアル……）

目の前で気持ちよさそうな顔をされればされるほど、不公平を感じてしまう。

彼のペニスは子宮口に届いていない。一番奥を開発され、荒々しく突かれる快感に慣れた身には生殺し同然だった。

膣の深い部分まで擦られるのは快感だが、子宮口を刺激する最後の一押しが足りない。娼婦をさせられていた時は当たり前だった、ストロークの締めを飾る快感がないのはもどかし過ぎる。

あの、身体の芯に響いて頭の上から抜けていくような深く濃密な快感。現状と当たり前だった時との違いをどうしても意識してしまい、欲求不満めいた感情と、もっと具体的に今の自分を苦しめる子宮口の疼きが蓄積していく。

「はああ、出るっ、ああああ、出るっっ！」

子宮口の手前を擦り続けていた亀頭が大きく膨れながらビクビクと強く脈打って

いる。そこは最奥の手前だった。恋人にピストンされる快感で子宮が降りてきていたが、あと一步届かない。

「もう少し頑張つてアル、もうちょっとで一番奥に届くアルっ」

そうすれば、彼に今以上の快感を味わってもらえるはずだし、自分ももっと気持ちよくなれる。このままで終わっては満足できそうにない。

メイリンは彼の背中に腕を回してしがみつき、逞しい胸板を引き寄せる。胸板と乳房をぐいぐい密着させながら、腰に両足を絡ませつつ、自分も腰を振る。

（こうすれば、もっと気持ちよくなって子宮も降りてくるはずアル、もう少し、もう少しアル！）

「あああ、メイリン、ああ、メイリンっ！」

しかし、それは逆効果だった。胸板にセックスの発汗で瑞々しさを増した乳房と勃起してコリコリになった乳首を強く押しつけられ、腹部から腰にかけてべったりとくっつき、尻の裏まで太腿に絡められる一体感。

鼻先にある紅潮したメイリンの美顔は、仄甘く熱い吐息を顔全体にぶつけてくる。若く麗しい退魔娘との密着感は、彼の興奮を弥が上にも高めた。

膣内のペニスは間断なく痙攣し始め、亀頭の膨張ぶりは次の瞬間にも破裂してしま
いそうな位。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「ああ、もうちよつと、もうちよつとアルから、んふあ、耐えて優、もうちよつとだけ、ああああ、あつ、ああああ……!」

どびゅうつつつ、どびゅつ、どびゅんうううう!

もう少しで最奥に届くという所で吐精が始まった。

鍛えられた若い男の射精の勢いはなかなかで、断続的に噴出する精液も熱くてネバネバしている。

「ああんっ……んふうあ……はああ……あああ……」

愛する男性の射精を膈内で受け止めるメイリンは、甘ったるいあえぎを漏らす、セックス慣れした者が聞けば満足していない女の呻きだと気がつく不満混じりの媚声だった。

(中に出てるアル……熱くてネバネバの……とてもいきのいい精液アル……優の精液アルのに……)

淫魔たちは子宮口をこれでもかと言う位にしつこく叩き、その末に汚らしい子種汁を吐き出していた。嫌だったのに、自分はそれで絶頂を迎えさせられることもあった。

それだけに、不完全燃焼感が強かった。もっとレベルの高い快感を知っているのに、それに劣るところで我慢させられた。まだ満足できないとばかりに身体は疼き、特に膈奥の物足りなさは狂おしい。

「気持ちよかったよメイリン……素敵だった……けど中に出してしまつてごめん……子供ができたら責任はとるから……あ、でもそうでなくともメイリンとは、その……」

「大丈夫アル。今日は大丈夫な日だから。それより、若いんだから一回じゃ出したりないんじゃないアルか？ 明日は休みだから……ね？」

「あ、ああ……今度は絶対抜くから……」

「本当に、今日は大丈夫な日だから……男の人は女の中で射精するのが一番気持ちいいらしいアルから……恋人同士アルから、欲望のままに振る舞つていいアルよ？」

今度こそは満足させてもらおう。そんな意識を込めて言った言葉だが、自分でもゾクリとしてしまった。「欲望のままに振る舞つていい」など、それでは淫魔たちと同じではないか、と。いくら欲求不満だとは言え、人間の敵たちと同じ風に考えてしまうことに自己嫌悪を覚える。

恋人と性器を擦り合っているのだけでも幸せなはずなのに、子宮口を擦つて気持ちよくして欲しい、膣内射精される快感を味わわせて欲しいと口にする自分の浅ましさにも驚きを感じた。

（でも……恋人同士なんだから許されるはずアル……）

免罪符を自分に言い聞かせながら、彼との二戦目に入るメイリンだった。次こそは、

淫魔たちにされた時のように満足させてもらおうと思いつながら。

「くっ、ちくしょう……こんな小娘に俺様が……！」

「ふん、威張ってた割には大したことなかったアルな」

残暑の厳しい夜。休日ならば親子連れがレジャーシートを広げている市民公園の芝生地帯の真ん中で、メイリンは追い詰めた淫魔を足蹴にしていた。

窮屈そうにタンクトップを着た筋骨隆々の男で、屈辱に歯ぎしりする歯はワックスがけしたみたい綺麗だった。昼間はスポーツジムのインストラクターでもしているのかも知れない。

メイリンは足に退魔力を集中させた。淫魔を冷徹に見下ろしながら、ぼうつと燐光を放つ利き足で敵のわき腹を蹴る。

ドガッ！

バットのスイングみたいな風切り音が響き、レスラー並みの大男が退魔娘の蹴り一つで芝生の上に仰向けにひっくり返る。

いつものマイクロミニな『退魔装甲』の裾が翻る。形よく膨らみ張りつめている太腿が下から丸見えになり、Tバックからはみ出る桃尻臀部が夜の大きと交わり合った。「まったく、大したことのない奴アル。こんな奴のためにわざわざこんな場所に派遣

されたかと思うと腹が立つアル！」

「おおおぐがあおお！」

真つ赤な紐Tバックショーツの股間を好色な淫魔に見られるのも構わず、鳩尾に足を置いてグリグリ抉る。鍛えられた厚い筋肉の感触が足の裏から伝わってきた。

「どうしたアル？ こんな小娘に反撃しないアルか？」

退魔力を集中させて燐光を放たせている足裏をさらに抉り込む。はたから見れば若い女が地団駄踏んでるみたいな格好だが、足裏と接触している淫魔の胸元に絶えず退魔力が叩き込まれているので、敵にしてみればダンプリンカーの重量で足蹴にされているのに等しかった。とても反撃する余裕などない。

「ちくつ、しょう、ぐううううつ」

「悔しいアルか？ でもその割には嬉しそうアルなあ」

胸元を踏んでいた足が股間に向かう。そこはテントを張っていた。

「踏まれていたのに、わたしのオマンコを見て興奮したみたいアルな」

退魔娘は軸足を引き、股間がよく見えるように広げる。真つ赤なTバックショーツはハイレグ気味で、陰部にぴったり貼り付いている。前布には糸で描かれたラベンダーが咲き乱れ、サランラップみたいに薄い生地のでふつくらした恥丘の輪郭が盛り上がっている。横幅の狭いV字なので大陰唇が今にもはみ出しそうな、微妙な緊張

感が張られている。

太腿の付け根と太腿が描く曲線のうねりは豊満でありながら単純で、一目見た男は淫魔のように視線を釘付けにされること必死であった。

そして、圧倒的に優勢の退魔娘は、淫魔を足蹴にしながら興奮していた。恥汁がシヨーツ全体をしっとり湿らせ、甘酸っぱい匂いが肉股の間からむわんとくゆっている。「殺されそうだったっていうのに、節操なくおっ立てて、みっともないにも程があるアル」メイリンは欲望のテントの直前で靴を脱ぎ、ハイソックスの足を出した。その足の裏でテントの天井を踏む。光を放っていたそれは、もう光るのをやめていた。

「っつ、お前……まさか……」

期待とも恐怖ともつかない呻きを漏らす淫魔。メイリンはそんな敵を冷酷な女王の目で一瞥した。

ぎゅ、ギユ~~~~ツ！ スリスリ、くにゅくにゅ、スリスリ。

立っていた肉柱を足裏で押し倒し、そのまま左右に擦る。踏んでいる足を軸足にし、男の真上に股間がくるように立ち位置を変えると、今度は足指を微妙に絡ませながら肉棒を前後に擦る。

足に扱かれる淫魔のペニスはズボンの中でどんどん硬く熱くなっていく。股間に注がれる視線は間欠泉みたいに高温で強い。足に与えられる屈辱の快感と、真上に広が

る女の花園をオカズにし、淫魔は明け透けに欲望を膨らませている。

相手が敵の退魔娘であり、麗しい若い娘だと言うことも拍車をかけているに違いない。ひよつとしたら、こういう趣味を持っていて、念願になった喜ばしさを牡らしく表現しているとも考えられる。

ともあれ。

「へ、へへ……なんだよ、俺を誘ってんのかよ。退魔師のくせに、淫魔とセックスしたいのか？ いいぜ、満足させてやるよ」

おぞましいねこなで声で卑屈な訳知り顔を向けてくる。

メイリンは応えるように淫魔の頬に利き手を添え、

「魔滅閃光掌」

ボソリと必殺技を発動させた。籠手が太陽みたいな光を放つ。メイリンの退魔力が魔を滅ぼす暴力となって敵に送り込まれる。

「あぎゃああアアア……！」

「勘違いするなアル。淫魔のくせに、わたしと対等だなんて不遜にもほどがあるアル」
炭酸ジュースみたいな音を生みながら、淫魔の身体が少しずつ薄れていく。

そうさせた退魔娘が移動して、見えかかっている淫魔のズボンを下着ごと脱がせた。
「てめえ、いつたいなんなんだ……」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「流石、女を四人も犯したただけあって強欲そうなチンポアル……」

斜めに反り返る逸物は、成人男性の平均を超える長さ太さを誇っていた。剥き出しの亀頭は黒の強い紫色で、カリがキノコの傘みたいにグンと張り出している。竿部はココアパウダーをふりかけたように黒ずんでおり、ボコボコ浮き出る紫色の血管がグロテスクさに拍車をかけている。

生娘ならば悲鳴をあげそうな一品に、退魔娘は瞳を潤ませた。

恋人のペニスを見るときには感じない、胸のときめきが起きている。

鼓動がトクトクと速まって、身体が秋の陽光を浴びてるみたいに火照ってきた。

「消滅するまでの間、楽しませてやるアル」

腰を跨ぎ、『退魔装甲』の裾が陰部よりも高くなるまで太腿を広げてガニ股になる。

淫魔が恐れと期待を交じらせて見てくるのにちよつとした高揚感を覚えながら、腰骨に乗っていたサイドの紐の結び目を解く。愛液を接着剤にして恥丘に貼り付いていた前布がだらりと斜めに垂れる。もう片方のショーツの結び目を解くと、淫魔の太腿の間へ向かって濡れショーツがゆっくりと落ちた。

その時、雲がすっかり流れた。周囲を照らす電灯に、厚い雲で遮られていた月光が加わる。メイリンの陰部が飴色に輝く。淫魔のペニスが釣り上げた魚みたいに勢いよく跳ねた。

くちゅ……。

「てめえ、淫魔を逆レイプしようつてのか……」

現状を正確に表している言葉も、退魔娘の淫行のブレーキにならない。それどころか、開き気味の淫裂から愛液が糸を引いて淫魔の亀頭に降り注ぐ。

「んっ……はああ……わたしはお前らが憎いアル」

逆レイプの言葉に反論しなかった。片手で肉棒を直立させながら、何度も人外に犯された肉壺に淫魔の亀頭を啜えさせる。一秒も躊躇うことなく、奥へ奥へと呑み込んで、敵の性器と粘膜を合わせあつ。

「んふうっ……ああ、熱い……硬い……ずっしりくるアル……」

奥まで啜え込むと、うっとりと目を細めて天を仰ぐ。すこぶる爽快な気分だった。それでいて、股間は淫らに煮立っている。

ズチュ、又チュ、ジユププ、ジユブツ、ジユブツッ！

「んう……わたしは淫魔に犯されて、娼婦のまねごとまで強いられて、ああっ、淫らにされてしまったアル、んふう」

ガ二股で膝をついた状態で腰を前後動させる。尻たぶのふくらみ始めに乗っていた裾が馬のしっぽみたいに舞い、桃形に突き出た尻たぶがブルンブルン波打つ。

チャイナドレスの貼り付いた胸元が、何度も人外に弄ばれた肉釣り鐘の輪郭を浮き

上がらせ、アメリカンクワッカーよろしく弾み回っていた。

「大好きなのに……愛しているのに……彼とのエッチでは満足できない身体にされたアル……エッチしても気持ちよさよりも欲求不満の方が強くなって……でも、優しい彼を傷つけられないから気持ちよかったって嘘笑いをして……わたしは本当にストレスが堪ってるアル！」

「なに、言つてやがる……」

第三者として真つ当な呟きを無視し、メイリンは激情を吐露する。

「だから、淫魔を殺す前にこうしてオナニーの道具にしているアル、はあっ、淫魔なんてチンポとセックスが達者なだけの役立たずアル。だからせめて、人間を守るために頑張ってるわたしが、彼と幸せな毎日を送れるよう、欲求不満を解消する後腐れのない道具になって少しは役に立つアル！」

淫魔の手で熟成された膣は、死にかけの敵の逸物も快楽に猛らせる。メイリンは恋人を上回る亀頭の先に、恋人ではなかなか触れられない子宮口を刺激させる。

勢いよく桃尻を弾ませ、思い切り子宮口に衝撃を与える。

そこを開発した淫魔の顔が脳裏をよぎる。自分をこんなふしだらにした存在への怒りを覚えるが、子宮口を刺激される快感は深く濃い。身体の芯から痺れてきて、火照っていた膣内が徐々に高温になっていく。

「んっ、はぁ、お前、もう何分もしないで消えそうアルな、はんっ、折角手加減して、最期に射精できるチャンスをやるアル、んふっ、死ぬ前に射精したらどうアルか、ひよっとすると、お前を弄んだ退魔師に種付けできるかも知れないアル、んっ、わたしを孕ませて、復讐してはどうアル？」

悦楽の吐息を漏らしながら尊大な眼差しを叩きつけ、人間ならばしてはいけない挑発をする。以前の退魔娘ならば眉を顰めて嫌悪する行為を、今のメイリンは進んでしていた。

「こいつ……うう、いいぜ、そんなに言うなら、俺のザーメンでてめえをボテ腹にしてやろうじゃねえか……！」

青息吐息だった淫魔が、メイリンの足首をガツシリ掴み、逞しい身体を上下に激しく波立たせる。

「あん、アンツッ！ ふふ、その調子アル、子宮口、降りてきたアル、んんんっ！ ああ、本当に、孕ませられるかも知れないアル、愛する彼がいるのに、っんん、淫魔と浮気して子供ができるかも知れないアルっ、んふうあ」

背徳的な状況を口にし、耳で聞くと快感が大きくなる。退魔娘と、彼女が倒した淫魔は息を合わせ、妊娠を目指した性行に耽る。

肉棒の根本と陰部の頂が密着すると、ぶしゅうと鈍い音を立てて愛液が漏れ出てく

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる



る。離れる時には高いカリ首に愛液が掻き出されて、肉棒を伝って根本に落ちていく。

淫魔の汚らしいペニスはすっかり退魔娘の愛液で濡れていた。電灯と月明かりに照らされて、根元からカリ首までぬらぬらと淫靡に輝いている。メイリンの陰部と太腿も同じだった。恥汁でコーティングされた股間周りが、退魔師と淫魔とのセックスと
いうあつてはならない交わりの激しさを物語っている。

「おおっ、出すぞ小娘っ、俺の種で孕め、おおお、孕めえ！」

霧程度の存在感しか見せられなくなった淫魔が、蠟燭が消える前の一瞬のゆらめき
みたいに儚く命を振り絞って叫ぶ。

これまでで最も強烈な突き上げがメイリンの子宮口に襲いかかった。メイリンが腰を
下ろしたタイミングとぴったり合わさり、死にかけた淫魔の剛直亀頭が退魔娘の子宮口
に嵌まり込む。

ブビュ~~~~~ツツ！ ビュクンツ、ドクンドクンドクンツ！

太腿を掴んで腰をせりあげ、ペニスを根本まで差し込みながら、筋肉質の淫魔は自
分を殺した退魔娘の膣内でたっぷり射精する。ほとんど見えなくなった身体の筋肉は
赤熱しながら盛大に盛り上がった。膣力を最大限発揮させながら、歯を食いしば
って最期の射精を行っている。

「ンツ~~~~~！」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

牡肉塊が子宮口へ突き刺さった刺激と、その直後に来た、とろみたっぷりの熱粘汁が広がっていく感触で淫魔を逆レイプした退魔娘も上り詰める。

ガ二股の体勢で背筋をビクつかせながら、斜め上に伸び上がる。双乳がブルツと弾む。顎が跳ね上がった拍子にお団子型のヘアクリップがポロリと落ち、緩くウェーブのかかったロングヘアが扇状に広がりながらそよぐ。

「はあああ……これ、これアル……ああ、やっとイケたアル……気持ちいい……」
月夜を瞳に映しながら、満足感に溢れた吐息をこぼす。

膣内の悦びが身体の芯まで蕩けさせる。恋人とのセックスではたどり着けず、だから渴望していただけに、高みに達した快感はひとしおだった。

「へ、へへっ……やったぜ……退魔師の小娘に俺の種を……」

自分を殺した退魔娘へ置きみやげを仕込んだ淫魔は、口角を釣り上げながら完全に消滅した。受精するかも定かではないと言うのに、やり遂げたと言わんばかりの達成感を顔に滲ませながら。

「ふう……フン、まあまあ楽しめたけど、淫魔の子供なんてごめんアル。帰って不味いアフターピルを飲むアル」

することを終えて立ち上がった退魔娘の股間から、淫魔の精液が塊になって垂れてきた。太腿を伝い、ハイソックスの下腿へと落ちていく。卵の卵白よりもドロリとし

ていて、鳥の糞よりも濃くて汚い白濁だった。不快な肌の感触といい酷くゆっくりした落下速度といい、ナメクジが這っているようだった。

「あらあら、せっかく命を燃やして残した種なのに。妊娠してあげたら？」
消えている電灯の陰から裸の女が現れた。

月夜の中でも奇妙な輝きを放つ紫色の長い髪。涼しげで妖しい切れ長の目。メイリンよりも豊満で、引き締まっているというよりは溶けかけのバニラアイスのだらしなさを帯びた、匂い立つ熟れた身体。

「あ……え……なんで……？」

ラヴアンダだった。メイリンを淫魔との逆レイプに走らせるきっかけを作った 無垢な退魔娘を調教したラベンダーの女妖怪。退魔拳師は確かに復讐し、憎い女妖怪がこの世から消滅するのを見届けたというのに、目の前に出現している。

「なんで生きてるのかって？ うふふ、違うの。あなたは確かに私をやっつけたわ。でもね、あんなこともあるつかとあの私は子孫を残していたのよ。元がラベンダーだから、種を残すのに人間や他の動物と同じプロセスは辿らないし、妖怪だから普通のラベンダーよりもずっと迅速お手軽に子供を残せるのよ」

旧知の友人に歩み寄る気軽さで、女妖怪はメイリンとの距離を詰める。女退魔師は動かない。蛇に睨まれた蛙よろしく、嫌な汗をびっしり浮かべる全身を小刻みに震わ

せているだけだった。

「因みに、記憶とかギジュツとかはぜえんぶ受け継いでるから。あなたが砂浜である私を殺したのも見ていたし」

「……今頃何しにきたアルか……復讐したいなら時間は幾らでもあつたはずアル……」

「あははは、復讐なんてそんなつまらないことは考えてないわよ。私はねえ、またメイリンちゃんと楽しくしたいと思ってここに来たの」

目と鼻の先で立ち止まった。粘い艶声のトーンを落とす、

「欲求不満だったようね。倒した淫魔を逆レイプするなんて、退魔師としてやっていいことだと思ってるの？ ああ優って恋人がこのことを知ったらどう思うかしらねえ」

「わ、わたしを脅すアルか……脅して、また調教する気アルか……！」

その気になれば簡単に殺せる女妖怪に、心の底から戦慄する。寒風吹き荒れる極寒の地に裸で放り出されたみたいに、身体中がガタガタ震えていた。

恐怖心である。淫魔を逆レイプするほど欲求不満に追いつめられていたというのに、この淫魔にさらに淫らにされてしまったら、自分は一体どうなってしまうのだろうか。

だが、その一方で、淫らな期待もあった。女妖怪や中年淫魔に調教された淫猥な記

憶が蘇り、時間が経って冷えてきた股間がぼうつと熱くなってきた。絶頂を味わって満足したはずの膣内と子宮口がキュンキュン疼く。今しがた消えた淫魔や恋人のモノを上回る剛直でピストンされることを催促しているみたいだった。

（あああ……欲しいアル……アレで犯されたい……でも、また身体を許したら……前のことを見ているならきつと同じ作戦は通じないアル……今度こそ逃げられないようにあいつに縛られて、淫らなことを毎晩毎日……娼婦として精気を集めさせられて……きつと輪姦とかもさせられるアル……はあ）

ふしだらな未来図がどんどん頭の中に構築されていく。身体はますます疼きだし、今では別の意味で総身が震えていた。

そんな弱々しい女退魔師を、ラヴアンダがまじまじと見る。瞳には嗜虐的な色はなく、子供のように屈託がない。

「うーん、そんなに嫌がられるのかあ。ならいいわ。怯える子を調教してもあんまり面白くないから」

ラヴアンダはあっさりと踵を返した。ゆっくりと一歩踏み出す。

「え……?」

「それじゃ、彼氏さんと仲良くね。あんまりやってるとバレるだろうから、淫魔を食べちゃうのもほどほどにね。私はもう、あなたの前に現れないから安心して」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

腕を上げてバイバイと手を振る。

ドクン！

一步、また一步と闇の中に入っていく女妖怪の姿が、メイリンの心臓を跳ね上げさせた。どうしようもないほどの切なさに襲われ、気がついたら走り出し、彼女の手を掴んでいた。

「あ、あ……わたし……」

「ん？ どうしたのメイリンちゃん。私に何かご用？」

一拍置いて、声の粘度を上げた。

「犯されたい？」

「そんな……あ……わ、わたし……わたしは……」

どうしても違うとは言えなかった。人間の敵に犯されるなど、駆除する対象ではないものに肉欲の解消を求めるなど、退魔師として、人間として失格である。その意識が強いからこそ、ラヴァンダとの初対戦で日焼け娘たちに襲われたことがショックだったのだ。

しかし、今はそれほどタブー意識を感じない。

望まぬ調教をした相手であるというのに今は憎いと思えなかった。ずっと会いたかった待ち人に会えた嬉しさみたいなの、恋人への親しみ以上の好感を覚えている。

視線は無意識の内に股間に向けられる。女妖怪のふっくらした魅惑的な恥丘に、自分を淫らに育て上げた肉棒がそり立っている様子を想像してしまう。

「そうよねえ。淫魔に犯して欲しいなんて言えないわよね。なら、私が脅してあげるわ」

股間を見ていた退魔娘の頬を両手で挟み、無理矢理上向かせる。妖怪らしい獰猛な輝きを放ち始めたアメシストの瞳で、こちらの瞳を真っ直ぐに見つめてきた。

「退魔拳師メイリン。あなた、私のペットになりなさい。私の欲望を従順に受け止める忠実な可愛いペットにね。そうしたら、今夜のことは黙っててあげるわ」

冷徹な女王みために厳然とした口調で言う。まなざしも冷たい。普段の友好的な表情に慣れていただけに背筋が寒くなるほどの威圧感を感じさせる。

「そんな……わたしは退魔師で……退魔師なのに妖怪のペットなんて……嫌だと断言できなかつた。そうするとみすみす快楽を逃してしまうから。かといっ

てハイとも言えない。そうすると退魔師とも人間とも言えなくなるから。人外の快楽欲しさに尊厳を売り渡した自分は、外道や下種と同種になる。

「バラされたいの？」

「い、イヤ……それも……だめ……言わないで……言われたらわたしはお終いになっちゃう……すぐに死ぬから……後腐れがないからあの淫魔にあんなことしたんだし

「……」
「なら、私のペットになるしかないじゃない。あなたはそうするしか助かる術はないのだから」

こちらの目を真っ直ぐに見ながら語調を強め、

「仮に私に犯されてよがっても、それは脅されてさせられたことだから仕方ないの。私の命令で、人間の男とでは味わえない快楽を味わって痴女みたいによがっても、あなたは脅されている被害者だから何も悪くないの」

「わたしは……悪くない……被害者だから……」

気圧されてオウム返しに呟くと、葛藤に押し潰されそうだった身体がふわりと軽くなった。欲望と矜持を選びきれず夜の闇よりも真っ暗だった目先が明るくなった。

「そう。分かった？ 分かったらこれをしゃぶりなさい。私を心から気持ちよくするよう、思い切り淫らにするのよ」

乱暴に引き倒されたメイリンが次に見たのは、股間から生える巨根だった。

「あ……いつの間に……はああ、これえ……」

「ほら、ぼさつとしてないでしゃぶりなさい」

髪ごと登頂をつかみ、別の手で勃起の根本を掴むと、メイリンの唇の合わせ目にねじ込んで口の中に押し込める。

「んぐっ、むうつ、んふーっ、んむっ、フーッ」

(こ、これ……ああ、この感触、この味……！)

燃えてるような熱感、鉄のような硬度と重量感。仄甘いラベンダーの風味。短期集中調教で慣れ親しんでいた懐かしい逸物そのものだった。

欲望の防波堤になっていた悪感情は霧散して、胸の中に多幸感が広がっていく。心臓が心地よく速まり、頭の中がぼうつと温かくなる。

「んむっ、プチュッ、んんっ、チュプ　！　ンフーッ、フーッ、えろお、はむっ、プチュ~~~~ッ！」

荒々しく鼻呼吸を続ける退魔娘。口淫は徐々に激しさを増す。上下の唇を締め付け、頬に深い窪みを生みながら頭を前後動させる。亀頭に吸い付いては思い切り吸引し、根本まで呑み込んで熱烈にバキュームする。

緩くウェーブのかかった長い髪を振り乱し、『退魔装甲』を纏った釣り鐘型の豊胸をタップンタップン揺らしながら、女妖怪の陰核ペニスを献身する。

快感刺激を与えられる逸物は体積を増している。口一杯に膨れ上がり、裏筋をねぶる舌に伸しかかっていた。顎が外れそうだった。歯を当てないよう注意するのが大変だった。

けれど、奉仕するほど胸の中に広がる幸福感が大きく濃くなる。恋人とセックスす

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

る時にも悦びは感じるが、あちらは日向の暖かさめいていて、こちらは心身を冒すような妖しさに満ちている。一度叩き込まれたら忘れられない中毒性を持っている夕子の悪い快樂だ。自分はそれに嵌まってしまった。

「はい、やめえ」

ラヴアングダはがつつく退魔娘から離れた。唾液に塗れた肉棒が、滴を飛ばしながらへそまで反り返る。

「ああ……はああ……はあ……はああ……そんな……」

跪いたメイリンが未練がましきたつぷりに呟く。瞳に映すのは、電灯と月光を浴びてぬらぬら光る逸物だ。退魔娘にとっては外道へと叩き落とした憎いものはずなのに、恋人のモノを見る時以上に熱い視線を注いでいる。

「来なさいメイリンちゃん。こつちよ」

ラヴアングダは優雅にベンチに座り、太腿を広げた。熟れた女体に妙にマッチした陰核ペニスの穂先がメイリンをじっと見つめている。

退魔娘は吸い寄せられるように、ふらふらと敵の前に歩み寄った。

長距離走を終えた時のように、心臓がドクドク鳴っている。喉がカラカラに乾く。

もう口から離れたのに、口内には逸物の感触が強く残っており、膣内には犯された時の感触がまざまざと蘇っていた。身体が炙られているみたいに熱い。こちらを見つ

める肉の穂先から目を離せない。

「さあ、これに跨がりなさいな」

親密さを取り戻した声でラヴァンダが誘う。勧誘のようで強制のようなく、どちらともつかない口調だった。

メイリンはコクリと頷き、女妖怪に背を向けた。

ラヴァンダは耳打ちしてきた。

「そ、そんなことを言えというアルか……わたし……わたしは……」

「深く考えることはないのよ」

優しく穏やかな顔で女妖怪が言葉を継ぐ。

「あなたは脅されているんだから。言うことを聞かないと人生が滅茶苦茶になるんだから、言っても仕方がないの。別に、メイリンちゃんが心の底から思っていることではなく、私が言わせたいだけの台詞なんだから」

（そ、そうアル……言わないと破滅アル……言っても、言わされただけの台詞アルから……）

メイリンはゴクリと唾を飲み込み、なかなか落ち着かない呼吸を静めてから言った。「た、退魔拳師のメイリンは、ラヴァンダ様のペットになりますアル……ラヴァンダ様が望むままに調教されますアル、はあ、はあ、淫魔様や人間に身体を売って、ご主

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

人様のために精気を集めることも喜んでさせてもらいますアル……はああ

退魔師として、人間として言うてはいけない台詞だったと言うのに、宣言し終えた身に伸しかかるのは後悔ではなく奇妙な充足感だった。

背筋がゾクゾクして、膣の奥がキユンと疼く。陰核ペニスを跨ぐ股間からは愛液がトロトロ流れ落ち、ビクつく逸物に降り注いでいた。

「よくできました。いいわよ、さ、私のこれで思う存分気持ちよくなって」

「は、はいアル！」

退魔娘は逸物の亀頭を摘んで垂直に立たせた後、おもむろに腰を沈めた。

にちゅ……ジユブブブブツツツ！

「んっ……あああああ……！」

命令されていないのに、勝手に一気に奥まで受け入れる。アンブレラみたいに開いた肉傘に膣壁を挟まれる感触は、それだけで軽く達するほどの快感だった。

熱くなっていた膣内はますます熱くなり、久しぶりにやってきた陰核ペニスを熱烈に締め上げる。ペニスの方はペットの膣には負けまいと、内側から圧迫してきた。ドクンドクンという力強い脈動が膣壁に響いてきて、それも巨根を啜え込んでいる実感を強めた。

「はああ、はあっ、ああああ、いいっ、これ、これが欲しかったアル、さっき犯した

淫魔のよりも凄くて、しつくりくるアル、ああ、イイ……っ」

このラヴァンダのペニスは自分の膣と長さがマッチしている。以前は根本まで啜えられなかったが、今は陰部と恥丘が密着している。結合部は挿入の時に溢れ出た愛液でぐしょ濡れになっており、月光を浴びて淫靡にテカリ輝いていた。

「どう？ 彼氏のよりいい？」

退魔娘の太腿をさすりながら、背後から囁いてくる。

「そ、それは……」

「答えてメイリンちゃん。脅されてるんだから、言っても仕方ないんだし」

「あ……あ……」

それは言っではいけない回答だとは分かっているのだが、言ってもいい状況であることを意識させられると何故か口にしたくなる。胸の奥が妖しくざわめき、膣壁と密着しているペニスが、早く言っしまえとばかりに力強く跳ねている。

「こ、こっちの方がいいです……ラヴァンダ様のものの方が……イイアル……こっちの方がメイリンは好きアル」

「んふふ、うれしい。相思相愛の彼氏のオチンチンよりも、敵で脅迫者の私のクリペニスの方がいいだなんて。メイリンちゃんは心の底から私のペットなのね」

「うああ……ペット……わたしが妖怪のペット……」

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる



「飼い主の義務として、たつぷり犯してあげる。彼氏とのセックスで溜まっていた欲求不満を溶かしてあげるわね」

ラヴアングダは人並み外れた妖怪の膂力を駆使して腰を振り、退魔娘の子宮口を突き上げる。淫靡に調教され、ご主人様の亀頭をぶつけられる子宮口は早速悦びを感じ始めた。

「んはあ、あああつ、いいつ、気持ちいいアル、子宮口犯されるの最高アルっ！」

肉壺の最奥に快感電流が迸り、子宮を抜けて頭のとっぺんを突き抜けていく。カリが抜ける寸前まで膣を跳ね上げ、子宮がせり上がる位に深く貫いてくるので、膣壁は高いカりに満遍なく擦られる。泣きたくなるくらいの快感に法悦の涙が溢れてきた。

「彼氏とのセックスよりいい？ 私に犯されるの好き？ 人間の敵なだけけれど」

「か、彼とのセックスよりいいアル、ご主人様に犯されるの大好きアル！ 人間の敵でも、気持ちいいアル！」

ペットに墜ちた退魔娘は、自分も腰を上下動させる。長い髪を舞わせ、豊満な乳房を威勢よく弾ませ、熱い吐息をこぼす。

牡丹色の濃くなった唇は半開きが常となり、真っ白い歯を覗かせながら舌をはみ出させる。唾液でぬめ光る舌は、快感が与えられるリズムに従い、絶頂した時の背中のように伸び上がりながらビクビクしている。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「んふふ、私もとっても気持ちいいわ。私を殺した可愛い退魔拳師とラブラブセック
スできるんですもの……はああ、やっぱり身体とオマンコを鍛えた若い子とのセック
スはいいわねえ。締め付けが強くて気持ちいい上に、オマンコもねっとり絡みついて
くるんですもの。いやらしくオマンコを鍛えてあげた甲斐があったわあ。メイリンち
ゃんも嬉しいでしょ？」

「はい、はいアル、調教してくださってありがとうございます！　メイリンをいや
らしくしてくださって感謝してますアル！」

「あー、そんなに感謝されると精液出さなくなっちゃうんっ、はああ、ああああ、出
るわよメイリンちゃん、はあああ、もうそこまで来てるう、あああ、いい、出して
い？　メイリンちゃんのオマンコに中出しするの許してくれる？」

子宮口を突く亀頭は膨れ上がり、逞しい脈動振動を叩きつけてくる。後にくる粘液
の放出を想像すると、否定する気持ちなど沸かなかった。

「出してくださいアルっ、いっぱい、メイリンの中にい！」

「ありがとう、んああ、あああ、出すわよ、メイリンちゃんのオマンコに、はああ
あ、彼氏くんご免なさい、メイリンちゃんのオマンコ使っただけでなく、私のきった
ない精液を出しちゃってごめんなさい、ああ、はああ、イクッ！」

ブビュウウツツッ！　ドビュツ、ビュルンツツッ！　ドビュウウウ！

深々と突き刺された先端が、子宮を持ち上げながら最奥の壁で炸裂する。女妖怪の遺伝子を満載させた種汁は熱湯顔負けの熱感と、卵白以上のドロドロ感を帯びていた。「はあああああ、イクツ、メイリン、イクアル！ あああ、イクイクイクイクツツッ！」

最奥に汚液を注がれる退魔娘は眉目を蕩けさせ、至福一杯の赤ら顔で叫ぶ。凜声は淫らに裏返り、絶頂を称える鳴き声と化していた。満たされなかった女の充足させてもらえた幸福がたつぷりまぶされている。

頤を突き上げながら口から舌を突き出して、背骨が折れそうなくらいに背中を仰け反らす。量感溢れる肉釣り鐘の輪郭がドン、と前に突き出る。頂ではぶつくりとそそり立った乳頭が微細に振幅していた。

「メイリンちゃん気持ちいい？ 彼氏くんじゃなく、妖怪の私の精液を注がれるのいくほど気持ちいいの？ 浮気してるのにイツちゃったの？」

「き、気持ちいいアル…… ああああ、すごいっ、あああ……」
敵であり人間でもない存在に快楽をねだった背徳。恋人がいるというのにご主人様と認めさせられた女妖怪に膣内射精させる不貞。

以前のメイリンならばとても生きてはいられないどん底のシチュエーションも、淫らにされた退魔娘にとってはドス黒い悦びを沸き立たせるスパイスに過ぎない。

チャイナドレス退魔師は敵でないと満足できなくなる

「んふふ、幸せそうねえ。もっと幸せにしてあげるわよ。なんととっても、退魔拳師のメイリンちゃんは、私のペットなんですもの。嬉しいい？ ペットのメイリンちゃん」

「はいアル…… ああ、ご主人様あ…… ペットのメイリンをどうか可愛がってくださいアル」

妖怪の巨根が膣内にみっちり嵌まり、陰核ペニスに内側から押される肉襞の隅々まで穢れた精液で満たされている退魔娘は紅潮した顔で呆けている。

結合部からは愛液と精液の混合汁が漏れ出ており、『退魔装甲』に包まれた乳房の乳首は、夜空に向かってそそり立ったまま。剥き出しの手足はすっかり桜色に染まっており、無数に浮く細かい汗が電灯と月光を反射して墜ちた女体をキラキラと輝かせている。

「ええ、もちろんよ。今夜は帰さないんだから」

女妖怪の心底楽しそうな含み笑いが、夜の闇に染み込んでいく。それが、敵同士の和姦が再開する合図だった。

終